

考える。大学生。



平凡な大学生活を送っていた、坂本くん。
でも、身近な人からお金の稼ぎ方、人の気持ち、自分の
心のコントロールなどを日々学び成功者として育っていく。

登場人物

坂本遼・・・某大学生。一応主人公。あほ。

後藤雅治・・・憧れの先輩。人たらし。やんちゃくれ。

蒼井華奈・・・主人公の彼女。ピアノとか弾いちゃうスイーツ女子。

中道治・・・同僚。ポジティブすぎて気持ち悪い。変態と言う名の紳士。

エース・ラファエル・・・留学生。年下のくせに学生起業しちゃってる。氏ね。

何でも勉強

高校時代に、このままではダメだと始めた大学入試。

某国立大学を目指すも、驚愕のセンター試験の結果に戦意を喪失。

そして、不本意ながら滑り止めで受けていた私立大学に入学し、大学トップの成績を目指すも、

サークルやバイトの日々を過ごし、

いつの間にか「某私立大学最高！」と叫んでいた。

あとなぎの一喜一憂は一体どこへやら。

そんなある日の出来事。

「あかんあかん！」

僕は大学の真ん中で叫んだ。もちろん心の中で。

教授は硬いし、講義もつまらない。そもそも大学って何なんだ？何のために入学したんだ？

何か学ばないとこのまま、ダラダラと大学生活を終えて、社会人になり、結婚して、子供が生まれ、年老いて、もらえるかわからない年金をもらい。死んでいくだろう。

まさしく、敷かれたレールに乗っている気分だ。

そんなことを思っている、僕はいざ何もできないでいる。

今日だって、講義をさぼってこうして教室の外で道行く大学生たちを見ていた。

大学にはいろんな人がいて、チャラそうな人たちもいれば、歩きながら本を読んでいるがり勉みたいな奴もいる。

僕は一体どの部類の人に入るのか。

本当の自分がわからないでいた。

そんなとき、見覚えのある陽気な格好の人がこちらへやってくるではないか。

「おいっす！」

いかりや長介か！と心の中でツッコんだ。

「こんにちは、後藤さん。何してるんすか？」

後藤さんは大学の先輩で、人望が厚く、いろんな人と知り合いである。

「いやぁー講義って、暇やん？暇やと空見たくなるやん？」

と煙草を吸いながら空を見出した。確かにいい天気だ。

「後藤さん、大学は勉強するところですよ。何しに大学来たんですか？」

何しに...僕は何しに大学に来たのだろうか？そんな僕の方も講義にあまり出ていない。

すると、後藤さんがため息とつきながらこう答えた。

「あんなぁーりょうちん。大学って講義受けるだけが勉強ちゃうんや。
わかるか？例えばこの煙草の銘柄見てみい？」

そうして、マルボロの煙草の箱を見せてきた。

なんて胡散臭い関西弁だろう。あと、言い忘れていたが、僕の名前は坂本遼だ。

「この箱が何なんですか？」

僕は箱をまじまじと見た。

「いいか？このMarlboroっていう字の下を隠してやなぁ、そんで逆さにして見てみると...ほら、

こっちが白人で、こっちが黒人で、白人が黒人の首を吊ってるように見えるやろ？」

「た、確かに見えます！？...いや、でもこれの何が勉強なんですか？」

僕は関心すると同時に、疑問を投げかけた。

すると後藤さんはまた、ふう～と煙草をふかせてからこう答えた。

「勉強っちゅうもんはな。こんな些細なことでも勉強になるんや。

例えば、この話を煙草吸い始めの学生にしてみいや。

掴みもろたで。

みんなリスペクトの目で見てくるで。

そんで、俺は人脈が増えていくわけよ。

そんな風に考えへん奴なら、ただのマメ知識や。

せやけど、こうやってその知識を応用できる奴にとっては、勉強になるわけよ。

そしてらもっと世の中見えてくるもんあるんとちゃうか？」

後藤先輩はドヤ顔をしている。

でも、確かにそうだ。

ただ日々を過ごすのではなく、こんな小さなことでも吸収して、何かに使えないか頭を働かせる。

「なんか良いこといいますやん！」

思わずタメ口になってしまったが、続けて喋りかけた。

「つまり、学校の授業だけが勉強ではない。どんな小さなことでもそれは勉強だということですね！」

後藤先輩は、また煙草をふう～とふかしながら陽気な声で

「そういうこっちゃ。」

そして、高そうな腕時計を見て、煙草を消し

「ほなデートあるからまたなあ〜。」

と言って去って行った。

デートかあ。

僕も後藤さんみたいにモテモテになりたいなあ。と彼女がいるけど思ってしまった。

人の目線

僕は、とぼとぼ歩きながら、講義に戻る。
大教室なので、勝手に教室に入っても教授には何も言われない。
それどころか後ろの席ではPSPをしている人もいる。

そう、そいつは同じサークルで学科も一緒の中道治だ。彼とはよく一緒にいる。
なぜなら彼は変態で面白いからだ。

何も変態＝破廉恥ではない。

とにかく性格が変わっているのだ。だが良い奴（一応フォローしておく）

彼の近くの席に座ると、僕に構わずガコガコと音を鳴らしながら激しくゲームをしている。
恐らく、モンスターハンターだろう。

この前、「違う教室から勝手に誰かが狩りに参加してきた。はっはっは。」とほざいていたし。

彼の見た目ははっきりいってダサイ。まあ顔は普通だが、服装がダサイ。

いつもジャージかそのままテニスに行けるような格好で学校に来る。

そんでもってここが重要だが、ナルシストである。
故に、一部の女子にはとても嫌われてる。
だが、一部の女子からとてもモテている。

世の中、需要と供給のバランスがしっかりしているのだと感心したものだ。

あと彼はそういった人間関係や服装やその他もろもろには全く興味を示さないのだが
テニス、麻雀、ゲームといったものにはトコトン強い。

大乱闘スマッシュブラザーズでは大阪大会3位だったらしい。

「よくYou Tubeで研究したわ。はっはっは」と言っていたあの顔が忘れられない。

隣で「んー」と声が聞こえて彼を見ると

無言でモンハンを辞め、学校のコンセントでPSPを充電し始めた。

僕は目の前で電気窃盗容疑に及んでいるが、大学ではそんなことは日常茶飯事である。

「お前、ほんま自由すぎやろ。」

とあきれた顔で言うと、中道は何の悪気もなく

「何でも好きなことやってた方が、人生面白いやん。」

と答えた。

この解答はある意味、人生の本質を突いている。

何の不安もなく好きなことをやって、生きていたらそんな楽しいことはないだろう。

また、これは彼の性格に出ている。

自分の嫌いなことにはトコトン手を抜き、好きなことにはトコトンのめり込む。

そんな自由すぎる彼にちょっと嫉妬して、意地悪を言ってみた。

「そんな何でもかんでも好き勝手してるから、人に嫌われたりするんやん！」

ちょっと言い過ぎたかな？と思ったが、彼は何も気にせず笑ってこう答えた。

「いちいち人の意見なんて気にしてたら、好きなことできひんやん。人の目線を気にして生きる人生が楽しいか？はっはっは。」

彼は確かに気持ち悪いところもあるが、モテる理由もわかる気がした。

妬む、怒る、愚痴る。そうやって人と比べたりするからどんどん自分が嫌になってくる。

他人を気にせず、自分の好きなこと信じたことをする。

僕も中道のように、将来や人間関係にビクビクせず生きていけたらなんて楽だろうに。と思った

。

肩書き

「ホゲー。。。」

講義はつまらない。

出席表を出すために授業に出ているもんで、僕は外を眺めながらボーっとしていた。

全く、今日もなんて良い天気してやがる。

そして、ふと思ったことを隣にいた中道に聞いてみた。

「お前って、T大目指してたのに、なんでこの大学いるん？」

すると、中道はこちらを見て、

「そりゃ、この大学に受かったからに決まってるやん。」

と、さも当たり前のような顔をして言った。そりゃそうやが...

「浪人とか考えんかったん？」

とさらに突っ込んで僕は聞いてみた。

「高校のときは、そんなことも思ったが、大学に入ってみるとどうでもよくなったなあ。肩書きにこだわる人生なんてつまらんやろ。」

はっはっは。」

地味に良いことを言うところが腹立つが、そんな肩書きに縛られる人生は嫌だなあ。

どこの大学に出たから偉いとかどの会社にいるから偉いとかそんなことにこだわっていたら、本当にやりたいことを見失いそうだ。

しかも、もしその会社を首になったりしたら、自分は一体何ができるだろうか？

不安だ....。

くそー。こいつは肩書きがなくても何だかんだ生きていける気がするところがさらに腹立つー。
とまじまじと中道を見ていた。

すると、ビーっという大学ならではのチャイムが鳴り、講義が終わった。

チャイムと同時に、中道は席を立ち、前の席に座っていた真面目そうな女の子のところへ行っ
て、何やら楽しそうに喋り出した。

そして、ノートを持って帰ってきた。

「ノート借りてきたから今からコピーしに行こうぜ。」

中道は講義のノートを取っていないため、真面目そうな女の子からノートを借りてコピーする
というなんとも厚かましいことを平然とやってのける。

「...お前なんかほんまメンタルすごいなあ。」

と僕が皮肉を言うと、中道は

「単位落とすくらいなら、ノート借りるやろ？」

と依然変わらない態度をとっている。

自分でノートをとって自分で頑張るより、確かに人のノートをコピーして、テスト内容を聞く方
が何倍も効率がいい。

そこがこいつの勉強してないけど、成績が良い秘訣だ。

いや、しかしだな。

しかしだよ中道くん！

と反論しようとしたが、

そんな僕もこの中道の人脈で手に入るノートに大変お世話になっているため

「...いつも、あざーっす！」

と言って、一緒にノートのコピーをしに行くのであった。

今日は後藤さんと京都に買い物しに行くことになっていた。

僕も何か服を買いたいなと思っていたのでちょうどよかった。

しかし、今日の後藤さんはいつにもなくオリエンタルラジオの藤森のような格好をしている……。

「しかし、ええなあ。平日の昼間からこんなぶらぶら京都にいれるなんて。学生の特権やで。」

後藤さんは機嫌よく、道の真ん中を悠然と歩きながら言った。

「そうですね。授業だけが勉強じゃない。こうやって、ぶらぶらするのも勉強ですもんね！」

僕は前に言われたことを言うと、後藤さんは

「いや、それは違う。」

とそっけなく言って、僕は思わず

「えっ～！！」

と小もないやり取りをした。

そうすると、向こうからとてもダンディズムなおじさんがやってきた。

そして、こちらに近づくなり

「お兄さんたちかっこええなあ。どこの店で働いてるん？」

とわけのわからないことを聞いてきた。

すると、後藤さんは慣れた様子で

「僕たちはどこでも働いてませんよ。」

と答えて、僕はさっぱり意味がわからず混乱した。

「じゃあ、ちょっとお話だけでもしに、喫茶店来てくれへんか？私は祇園でSoulってところのオーナー
してます。木村です。よろしくお願いします。」

そういうと、後藤さんは

「わかりました。実はその世界に興味がありまして、ぜひ働いてみたいと考えていました。」

木村さんも笑顔で

「そうか！なら話が早い。まあとりあえずあそこの店で話をしよか。」

と言って、僕もよくわからないまま喫茶店に入った。

木村さんはとても良い人そうで、飲み物をごちそうしてくれた。

木村さんはコーヒー、後藤さんはカフェオレ、僕は、バナナジュースを頼んだ。

「じゃあ、君ら、ホストってどんな世界や思ってる？」

そう木村さんが言うと、僕は「...んっ！」と声に出しそうになった。

後藤さんは臆することなく

「女性を幸せにする仕事です。」

と真面目に答え、木村さんもまんざらでもなく

「その通りや！」

と言い、自分の武勇伝を語り出した。

話を聞いていると、木村さんは凄腕のホストだったらしく
一か月の給料は100万を超えていた。

僕はあまり喋らなかったが、
後藤さんはあたかも前から知り合いであったかのように木村さんと話をしており、
そのまま、ホストクラブに足を運び、後日、二人で体験入学することになった。

そして、そのまま帰りの電車で僕は今までの言いたかったことを一通り後藤さんに話した

「後藤さん、ホストとか僕初めてで大丈夫なんですかね？危なくないですか？
昼夜逆転しちゃいますよ？てか服買いに来たんじゃないんですか？」

後藤さんは電車の中でニヤリとし

「今日俺が何のためにチャライ格好してきたかわからんか？
ホストにスカウトされて、夜の世界っちゅうもんを体験したろう思うてな。
これで乙女心の極意を得るゆう話や。」

なっ、なに～！最初からそういう企画だったのか！僕は買い物する気満々だったのに～。

「でも、乙女心ゲットって何ですか？」

と僕が言うと、後藤さんは

「お前なあ、ホストっていうのは女性を喜ばせるプロやねん。
生きていく上でなあ、本物を見るっていうのは、めっちゃ勉強になるねん。
偽物見ても勉強ならへんで。」

後藤さんの人間関係の勉強への熱意は、すごい。そのためならホストも利用する、か。

僕もあまり乗り気ではなかったけど、そう言われるとやる気が出てきた。

「働きながら勉強する。しかも時給2000円ですもんね！超良いバイトですね
。僕、俄然やる気が出てきました！」

よし、俺も後藤さんのようにモテるために、本物からいろんなことを盗んでやるぞ！

価値ある人間

その日の夜は、バーとかカラオケとか行って、二人でワイワイしていた。
傍から見たら、男二人で気持ち悪い。

カラオケでは合コンのために二人でデュエットの曲の練習をして盛り上がった。
後藤さんいわく、
練習、本番、復習は1:1:1の力の割合が大事らしい

だが、結局最終的にアニソンにいつてしまうのがモテない理由だろうか。
おじゃ魔女どれみの曲なんかもう完璧に歌えてしまう残念さ。

そして、あっという間に時間は過ぎていき、始発の電車で帰ることになった。
家は田舎なので、電車の中は次々と人がいなくなり、始発のせいもあってか車両はついに僕と後藤さんだけになった。
この日は天気が良く、こんな平日に僕はなにをしているのだろうか？と疑問は感じていたが、そんなことは了承済みである。
大学生活を後藤さんと過ごしている時点で廃人だ。

まだ二人のカラオケの時のテンションが抜けきらないとき、後藤さんが口を開いた。
「てか、ねむない？あー眠い。電車の上に荷物置くとこあるやん。あそこで寝てみいひんか？」

この人はなんてことを言うのだろうか。僕は
「まあ、あそこに乗らないでくださいとは書いてませんしね。」

後藤さんは、臆することなく
「よし、行って来い。」
と言うと同時に、
「僕ですか！？いやいや、後藤さん眠いって言ってたじゃないですか！？後藤さんでしょ。僕捕まりたくないですよ〜。」

彼は僕に有無を言わず
「はよ行けや。」
と僕を電車の椅子から押し出した。

なんて無茶ぶりだよ後藤さん...でも、ちょっとやってみたかったんだよなあ
と嫌々ながら僕はまんざらでもなかった。

荷物置き場は、登りにくく多少苦戦したが。なんとか横になることに成功した。
その間、僕は停車駅で誰かが乗ってこないかドキドキしていた。

後藤さんはしきりに、

「はよ、登れや！どうやねん？どんな感じやねん？」

と言ってきた。僕は素直に

「ここ何気に怖いです！しかも、痛くて寝にくいっす。でも眺めはいいっすねえ。」

と言うと、後藤さんはヘラヘラしながら

「お前、ほんまあほやなあ。写真とっところ。」

と言って、パシャパシャしだした。

僕はその間、電車の振動で体にダメージを受けながら、荷物の気持ちを味わっていた。

そのとき、電車が駅に止まりそうになり、僕は誰かが入ってくると察知し、とっさに降り始めた。

「だめです。絶対、誰か来ます。あかん。めっちゃ降りにくい。」

と僕がテンパっていると、後藤さんはキャッキヤ笑った。

降りると同時に、電車がプシューと音を立てて、扉が開き、人が入ってきた。

危なかった。

朝から冷や汗ものだよ。

後藤さんはまだ笑っていた。それを見て、なんだかおかしくなって僕も大笑いした。

乗客がなんだこいつらという目で見ているが、僕らは気にしなかった。

ようやく笑いが落ち着くと、後藤さんはこう言った。

「こんな小もないことできるのって、学生のうちだけやん？そういう普通の人やらないことど
んどんやってったら価値ある人間なれるで。すでにお前は、電車の荷台で寝た数少ない特別な人
間ちゅうわけや。」

この人の発言に、僕はまた

「寝て何に、なるんですか。」

と本当に小もないことで笑いながら言った。

でも、こんな小もないことで笑えるのって今だけなのかなあ。

社会人になっても面白いことをして生きていきたい。

しかし、後藤さんといると面白い。

この人には何か人を引き付ける何かがある。僕は後藤さんのような小もない、かつ面白い人間になれたらと思ってしまった自分にビックリした。

情けは人の為ならず

この日は、ホワイトデーだったので僕の彼女、蒼井華奈に会う予定だった。

彼女は、女子大学生で小学校の先生を目指している。特技はピアノで小さいころから習っている。

紅茶と服が大好きで、今どきのスイーツ女子だ。

この日も二人で定番のカフェにいた。

「それでなあ、ショウコが彼氏が欲しいっていつつも言ってるねんけど、私はもっとカッコいい人いると思う。でもなあ・・・それで、アキが・・・ヨーロッパがすごく綺麗で・・・」

華奈が喋っている言葉を解読するのは難しい。

女性は結論がない会話を平気でする生き物で、それを聞いてあげるのが男の役目だとどこかの雑誌に載っていたが、理解することと実践することは全然違う。

僕は「うん。それで？」と頷きながら、ショウコが誰で、アキが誰でとパズルを解読するように、頭を整理していった。

ようやく最近の華奈情報話がひと段落したところで、僕は

「そういえば、グミ欲しいって言ってたやんな？世界中を探しました。そして・・・見つけました。」

と目撃ドキュン(テレビ番組)風に言いながら、海外のよくわからないグミを大量にプレゼントした。

「わーい、有り難う！何これ？ハリーポッターの百味ビーンズみたいなのあるー。」

と嬉しそうにはしゃいでいる華奈の様子を見て、僕はホッとひと安心した。

それと同時に、このグミを購入する経緯を説明することにした。

「最初、どこの百貨店行ってもグミって売ってなくて、店の人に聞いてもスーパーにしかってん

やから、落ち込みながら、ここらへんに住んでいる友達に電話して、

『まあ何も言わずに今から梅田集合で』って言って、この話したら、

『あの店に輸入商品売ってるから行って見たら？あとさっきアンケート答えて1000円分のギフトカードもらったからやるわ。』って言われて、グミ売ってるお店と1000円ギフトカードくれ

てん！」

すると、華奈は視線をグミから僕に向けて

「それって、引き寄せの法則じゃない？」

と言ってきた。僕は最初、そんなスピリチュアルなことを言うなんて、こいつどうしたんや！？

と思ったが

よくよく聞いてみる「引き寄せの法則」と言うものはちゃんと理論がかった。

「引き寄せの法則っていうのは、

例えば、グッチの鞆を買うと、街中でグッチを見かけるようになったり、好きなミュージシャンの曲が、たまたま入ったお店でよく流れていたり、携帯をアップルに変えたら、アップルユーザーと出会うようになったり、こんな感じで、自分が意識したことが自然と引きよってくるようになるのよ。」

とエッヘンとでも言いそうな口調で言うので、僕は

「それが今回のグミとどういう繋がりか？」

と不満げに質問すると、華奈は

「それは遼くんが百貨店で買うくらい、つまり、1000円くらいのグミを買おうと意識していたから、1000円とグミを買う場所が引き寄ってきたのよ。」

と目をキラキラさせながら喋っている。

僕は、まだ「たまたまだろう」という気持ちをぬぐい切れていないが意識したものが引き寄ってくる理論には感心した。

「あと、遼くんいつも自分はいろんな人に助けられて、運がいい！って言ってるやんなあ？それは遼くんが優しくて、いつも人に笑顔を与えているから、優しさと笑顔を引き寄せてるんだよ。」

とさらにまくしたてるように華奈が言うので、僕は何もできず、ただただ

「そ、そんなことないよ！俺が？」

と恥ずかしがっていた。

華奈は、

「そうかなあ〜？」

とこちらをじろじろ見つめていた。

僕は自分がそんな人物だなんて思ってもみななかった。確かに、僕はよく自分は運がいいと思っている。友達だけじゃなく初めて会った人にもよくサービスされる。

切符を買おうとしたらで知らない人に1dayパスをもらったり、レストランで頼んでもいない料理をプレゼントされたり、エコノミーからビジネスクラスに航空座席がランクアップしたりと、小さいながらもこんなことが良く起こる。

考えてみたら、僕はよく道を聞かれたり、そこらへんに落ちている他人のゴミを捨てたり、献血に貢献したりしている。これが何か関係あるのか？

「情けは人の為ならず」

この言葉の意味って確か

「情けは人のためではなく、いずれは巡って自分に返ってくるのであるから、誰にでも親切にしておいた方が良い」

という意味だった。

僕が他人にした情けは一体どうやって僕のもとへ巡ってきたのだろうか？

と考えてみたが、答えは見つからなかった。

綺麗な言葉

一通り、引き寄せの法則がわかったところで、華奈が

「あとね、あとね。」

と女子力アップのような本が好きなのか、また新しい知識を披露してくれた。

「使う言葉を良くすると、人生が良くなるの。」

僕は腕を組みながら

「使う言葉？そんなんで？」

と眉間にしわを寄せながら疑ってかかった。そうすると華奈もちょっとムスツとして

「ちゃんと理系の遼くん信じてもらえるように理論があるから、最後まで聞いてー。」

とその言い方が可愛かった。僕に気にせず華奈は

「えーっと、話に戻ると、人間の脳には主語を認識せずに処理するっていう特徴があるの。だから、例えば

『Aさん可愛い！』とか『Bさんすごい！』

って言ったときに、自分の脳は

『わたしって可愛い！』とか『わたしってすごい！』

みたいに処理するの。

逆に、『あの人は最悪』って言えば『わたしって最悪』になっちゃうの。」

と丁寧に説明してくれた。

確かに、悪口や不満を言う人はイイ人のイメージがない。

それでもって、輝いてる人はよく相手を褒めている。

まさしく、後藤さんがそうだ。と頭に浮かんだ。

そして、僕はちょっとずつ疑いが晴れ、喋る言葉にそのような影響力があるのかと感心した。

「どう？ちょっとは納得した？」

と華奈が笑顔で聞いてきたので、僕は、うんうん！と頷いた。

「つまり、人を褒める人っていうのは、自然と自分も褒めていて、自分の発する言葉が自分を輝かせるの。だから、遼くんももっと私を褒めて、自分を輝かせなさい。」

華奈はエッヘンとリアクションをとり、自分のリアクションに笑っていた。

僕もつられて

「華奈のそのリアクション、めっちゃ素敵やん？」

と島田紳助風に早速褒めてみて一緒に笑った。

僕は発する言葉も大事だけど、こうやって一緒に笑っていただける人が側にいることの方が断然大事だと思った。

ついに、ラファエルさん登場

僕は大学の昼のキャンパスでコーヒーを飲みながら大学内を歩いている人を眺めていた
・・・やっぱり春は気持ちいいなあ。

大学でコーヒーまったく飲んでる俺素敵やん？

と目を細めて太陽を見た。

太陽も僕を歓迎しているように見えた。それくらいポカポカしている

また、人を見ていると何やら異色な人間がいる

ガタイがでかく、黒人で、黒いTシャツにドクロの刺繍。日本には到底、不釣り合いだ。

ただ、かけている眼鏡はサングラスではなく、がり勉が掛けていそうな眼鏡。

そんな奴がこっちにやってくるではないか

ま、まずい・・・

殺される・・・

「誰か助けてー！」

僕が声を出すと、その黒人は

「なに言ってるんですかサカモトさん？」

と片言で喋りかけてきた

僕は悪気もなく

「いや、怖い人が来たと思って・・・」

と言うと彼は

「ちょっと難しいです」

と僕の冗談がわからないようだった。

この黒人の彼はエース・ラファエルといって僕の研究室の留学生で、忍者ナルトが大好きで日本に留学しに来たというインド人だ

彼は留学しているにも関わらず、何やら金儲けをしているらしく、よくビジネスの話を良くしていた。

前も、僕に

もはや会社勤務＝安定ではないデース。リーマンブラザーズのような大きな証券会社でも倒産してマース。仕事がなくなっても生きるスキルがないと終わりデース。」

「日本の平均年収も減少傾向にありマース。それは、ベトナム、中国、日本などの世界がボーダ

レスになっているからデース。つまり、中国人にできないスキルを身につけないとお金がもらえませーん。」

「これからはグローバルの時代デース。日本にいてもデインジャーデース。フリーランスで生きていくスキルが必要デース。」

などと言っていた。

初めは彼が何を言っているのかよくわからなかったが、これから僕は「ビジネス」というものを知ることになった。

資本主義経済の中では、労働者は搾取され続ける。

「まず資本主義経済がどのようなものか説明しなさい。」

ラファエルは僕が聞いてもいないのに、喋り始めた。

「まず19世紀のドイツ人経済学者のカール・マルクスは知ってますか？」

彼の唱えた資本論は有名デース。彼はこんなことを言いました。

『資本主義経済の中では、労働者は搾取され続ける。豊かになれない。だから、共産主義経済に移行しなければいけない。労働者よ、団結せよ！革命を起こせ！』と。」

僕は説明がなんだかわからず

「そんなこと実際にあるん？それ昔の話やろ？」

と反抗してみた。

「ハイ。もちろん今革命は起こせませぬ。ただ現在も資本主義経済では、労働者はラットレースに巻き込まれ、豊かになることはできませぬ。なぜなら彼らは自分の労働と時間を切り売りしているだけデース。」

僕はなんか聞いたことある単語がでてきたと思った。確か、誰かが『金持ち父さん貧乏父さん』という本を読んだか何かで『ラットレース』がどうか言ってたなあ。

「でも、労働者にも年収1000万とかの人もあるやん？そいつらは豊かじゃないの？」

と僕はあくまで反抗的だ。

「ハイ。豊かじゃありませぬ。坂本さんは今アルバイトの給料に満足してますか？社会人になって、給料が何倍も上がれば少し裕福になると思いますか？」

質問の意図がわからないが、僕は

「そりゃそうやろ。学生時代よりかはお金に余裕が出るわ。」

と答えたが、ラファエルは真面目な顔をして

「そうはなりません。坂本さんはまだわからないかもしれませんが、社会人になっても、より給料が高くなればと思ってしまうはずデース。なぜなら給料はその人が生きていくのに必要な金額しかもらえないからデース。」

僕はそうなのか！？と疑問に思っていると彼は続けて答えた。

「会社の給料はほぼ似たり寄ったりデース。例えば、40代で子供が3人で家を買っていけば、会社から子供手当や住宅手当が出て、結果として年収**1000**万になったりしますが、あとに残るお金はほぼないのデース。だから、年収が上がっても裕福になれませーん。」

僕にはまだ難しい話のように聞こえる。

そんな僕の顔を見てか、彼は

「今日はここまでにしマース。これから坂本さんには幸せになってもらうためにいろいろ教えていきたいと思いまース。ではまた今度だつてばよ。」

ナルト好きのらラファエルの最後の語尾がどうもしまらないが

彼の話の聞いていれば、今後、お金に困るようなことはあんまりないだろうなとなんとも思った。

男性も日傘をすべし

「しかし、日差しがきついのお、坂本くん。」

後藤さんはそう言って、僕と大学の坂をゆっくりと歩いていた。

「はい。きついです。でも日差しよりも違うところがきついです。」

僕は、汗をダラダラかいて言った。

何を隠そう、僕は後藤さんの重たい鞆（漫画大量）を持たされていた。

「お前はもっと筋肉つけなあかんねん。あほ。」

坂本さんは涼しい顔で上から僕を見ながら言った。

「そ、そんなこと関係ないでしょ。ただ、僕をパシってるだけでしょ。」

僕は目に入りそうな汗をぬぐっていると

「ちゃうわ！お前のためやがな！」

と思ってもないことを彼がへらへらしながら言った。

「しかし、後藤さん。男のくせに日傘とかダサくないですか？」

そう。彼は今、日傘をさしながら歩いている。

僕の尊敬する後藤さんがこんなダサい姿で、僕は悲しいです。

と心に感じながら質問した。

すると後藤さんはやれやれとした顔で

「お前、太陽光なめんなよ。」

と言った。

僕だって紫外線が体に悪いことは知っていた。

「でもそんなこといちいち気にしなくてもよくないですか？」

更に僕は聞いてみた。

「だから、なめるなって言ってるねん。ずっと紫外線浴び続けた人の肌見たことあるか？昔アメリカでなあ。トラックの運ちゃんが、職業上ずっと顔の片面だけ紫外線を浴びててん。そいつの右の肌と左の肌、全然違うかったで。片方だけめっちゃ老化しててん。」

そう後藤さんは言ったが、僕はそれがどの程度かわからなかった。

でも

「でも、ビタミンDを作るのに日光浴は必要じゃないですか？」

僕は今思い出したことを口にした。

後藤さんはまた、やれやれという顔で

「お前一日に必要なビタミンDを生産するのにどれだけ日光浴必要か知ってるか？指先一本を10分間当てるだけでいいねんで？それでも必要か？」

と言うと、さすがの僕も

「えっ！？それだけなんですか？」

と驚いた。

「そうや。だから紫外線なんか有害でしかないねん。そもそも俺なんでこんなことしてるか知ってるか？」

彼は知らない間に僕より少し前を歩いている。

「知りません。」

僕は荷物が重すぎてちょっと会話するのもだるくなってきた。

「なんでかって言うとなあ。俺、年取ってもイケイケのモテモテのエロエロのおっさんでいたいからな！」

「・・・しょうもな。」

「えっ？坂本くんどうしたの？」

「・・・まあ、そうですね！じゃあ僕も明日から日傘しまーす！」

危ない危ない。あまりのだるさに急にタメ口になってしまった。

まあ紫外線が体に良くないのは知っていたけど、確かラファエルがビジネスの世界でも容姿はとても大切に、成功者は健康とか服装とかに気を使っていると言っていた。

僕も周りを気にせずに、後藤さんのように日傘をしようと思った。

なにより彼が日傘をしているなら、まあ大学内で日傘をしているのは僕だけじゃないってことになるから

ちょっと頑張れるような気がした。

金銭欲が強い人が、多くのお金を手にいれることができる

僕は最近、大学生活を適当に過ごすのではなく
後藤さんやラファエルの言ったことを考えながら過ごすようにしていた。

ラファエルの話は最初は学生である僕にとっては、つまらない話だと感じたが
ただの大学生とは違う考えを持つことで、少し優越感といったものに浸れるのではないかと思
った。

あとは、将来への不安がそうさしているのかもしれない。

以前もラファエルはこんなことを言っていた。

「独立して事業を起こした創業者で、
成功し大きな資産を築いている人に共通していることは、

お金に対する執着心が強いということデース

彼らはお金を儲けることに一生懸命デース。何の遠慮もためらいもありません。
つまり、お金を得ること、増やすことを心から望んでいるので、
その願い通りに手に入れている風に見えマース。」

「しかし、多くの人は、もっとお金があったらと思っているにもかかわらず、
金銭に貪欲な人を卑しいと感じたり、お金のことばかり言う人を軽蔑したり、
お金に対して少なからず否定的な感覚を持っていマース。」

「坂本さんはこんな風に考えることはありませんか？」

- ・ お金があれば幸せになルールとは限らナイ
- ・ 目の前にある仕事を一生懸命やっていレーバ、結果は後からついてくる
- ・ お金のことを真剣に考えたことはナイ
- ・ なかなか達成しないので、年収目標は立てていナイ

・先のことは考えナイようにしてイール

これでは、お金が欲しいといくら思っても、
それを実現する考えや行動に向かっていきません。

結局のところ、

良い意味で金銭欲が強い人が、多くのお金を手にいれることができるのデース。」
何か似たようなことを聞いたことがあった。

確か以前、蒼井華奈が「引き寄せの法則」がどうたらこうたら言っていたのを思い出した。

「確かに、僕もお金もうけは悪い人のイメージがあるわ。実際、ラファエル悪そうな顔してる
しなあ」

と僕が笑いながら言ったが、彼は

「坂本さーん。つまらないデース。」

と相変わらず冗談が通じにくい奴だと思ったが、そう言いながら彼は笑ってくれた。

結局、この話も華奈が言っていた「引き寄せの法則」と同じなのではないだろうか。

僕の周りに変な人が寄ってくるのも、僕がそう望んでいるからか。

友人たちの変態ぶりを思うと、ちょっと納得したりもした。

他人の感動

2010年ワールドカップベスト8

WBCの最後のイチローのヒット

次のワールドカップはどうなることか。

「ほんまにすごかったよなあ！日本すごって思いましたねー」

僕は相変わらず教授が来る前の教室でくだらない話をしていた。

「それで、ラファエルはどう思った？」

そう、僕の隣にはラファエルがいる。彼は本を読みながら僕と喋っていた。

「あんまり、興味ありません。インドスポーツ弱いし。僕もスポーツダメダメです。」

彼はこちらを見てそう言うと、また目線を本に移した。

しかし、彼の趣味ってなんやねん。と思い、

「そーいやラファエルの趣味ってなんかあるん？」

と素朴な疑問を聞いてみた。

すると彼は

「僕は今、勉強とビジネスしか興味ありません。」

とそっけなく答えた。

僕がふーんという顔をして

心の中で、なんと小もない奴だろう。こいつは友達少ないに違いない

とかなんとか思っていると

彼はそんな僕を見て、不満になったのだろうか

不満を吐き出すように喋りだした。

「スポーツ選手はすごいと思いきや。本当にすごい。彼らの努力、才能は認めよう。

でもそれに一喜一憂しているあなたたちは何をしましたか？これはいわば、他人の偉業、成功デース。

あなたはイチローとは知り合いですか？たぶん違いや。ただ日本人というだけの共通点デース。

そこにあなたの幸せはありますか？本当は自分自身が成功しなければならないのではないですか？

だから僕はまず自分の成功に興味があるだけで一す。」

そう答えられると僕は

「うっ、ラファエルは厳しいこというなあー。」

と苦笑いをしながらごまかした。

確かにそうか。

この感動は他人の偉業なんだ。

僕がワールドカップベスト8進出したわけでもWBCで逆転のヒットを打ったわけでもない。

そこに僕自身の本当の感動はない。偉大な彼らの功績にただ、同じ日本人として誇らしげに思っただけなのだ。

そう思うと、僕はラファエルのように少しストイックに自分自身の成功について考えなければならなかった。

遅刻するくらいなら休む

ジリリリリ

「・・・。」

ジリリリリリリリ

「・・・・・・・・。」

ジリリリリリリリリrrrrry!!

「うっさいわ！」

僕は目覚まし時計にチョップした。

シーン。

僕の目覚まし時計はめちゃくちゃうるさい。

なぜなら寝坊しないようにロフトで定員さんに、一番うるさい目覚まし時計をください。と頼んで、5000円もする爆音目覚ましを買ったからだ。

はぁ～。大学生やのに、土曜に研究室の会議とか終わってる。人生オワタ。

というかそもそも僕が行かなくても地球は何も変わらないよ。

むしろ、起きる労力で発生する二酸化炭素が地球温暖化を起こしてしまう。

・・・

・・・・・・・・。

ZZZ・・・ZZZ・・・ZZZ。。。。

「はぁ～。はっ！！」

僕は今起こっているできごとに飛び上がった。

時計を見ると今8時50分だ。

そう。9時に学校に行かなければならないのに、寝過してしまった！

今からバイクで飛ばせば、9時10分には学校に着くが、うわぁ一怒られるー！

僕は慌てて支度をし、家を飛び出した。

バイクに乗っていると、赤信号に引っかかってしまった。

こういう時の赤信号はとても憎い。

そして、学校のバイク置き場に着いた時には9時5分だった。

よし！いや、良くはないが、これなら9時10分に教室に行くことができる。

そう思って、走って構内に行こうとしたとき、見たことある人がタバコを吸っていた。
後藤さんだ。

僕は、挨拶を10秒で済まして、教室に向かおうとすると、後藤さんが
「ちょい、待て待てい。何をそんな慌てとるんや？」
と僕を引き止めた。

「いや、ちょっと会議で遅刻してるので、急いでます。それではまた。」

僕はゼィゼィと呼吸が乱れて、なおも先に進もうとすると

また、後藤さんが僕の肩を掴んで

「まあ、遅刻は遅刻やから、一旦俺の話聞けや。」

と笑って言った。

なんて人に掴まってしまったんだ。

人生オワタ。

そう思っていると後藤さんは構わず喋り出した。

「お前なあ、数分ならまだしも、数十分の遅刻なってくるともうその日休んだ方がええで？

だって、考えてみ？

いきなり会議室遅れて入ってきたら、自分めっちゃ目立つやん。

しかも、朝って基本みんな機嫌悪いねん。

そんなとき、お前がへらへらして会議室入ってきたなら、教授にグーでパンチされる勢いやで。
」

僕はもう遅刻に関しては、どうでもよくなってきたところだったし、確かに、朝って教授の機嫌が悪いんだよなあ。

「せやから、せめて午後から行った方がええで。午後はみんな昼飯食って、朝より機嫌が良くなってるし、お腹一杯で思考が弱まってるねん。そんなときに、『ちょっと朝下痢で体調崩してました。』って言ったら、みんなもう遅刻なんかどうでもよくなって、すぐ許してくれるで。むしろ、体調悪いのによう来たなあって褒められるかもしれへんな。」

僕は、疑ったまなざしで後藤さんを見つめ、それから下を向き、ため息をついてこう言った。

「まあ、もうどうでもよくなってきたので午後から行くことにします。」

そうすると、後藤さんは煙草を消して、

「ほな、ちょっとコーヒーでも飲みながら猥談でもしよか。」

と笑顔で、僕を連れて構内のカフェに入った。

その後、なぜ午前中に来れなかったのかと怒られるのを覚悟で午後から教授に謝りに行ったが全く怒られなかった。これはどういうことか、後藤さんの言ったことが正しい結果になった。

後に、この話を蒼井華奈にして、

「この心理法則を『遅刻したら、午後から行く法則』と僕は名付けたわけですよ。」

そう言うと、華奈は、ふーんという顔をして言った。

「そもそも遅刻しなければ、いいのよ。」

なかなか厳しいことを。僕は苦笑いした。

教授

僕の直属の斎藤教授は厳しい人だ。

卒業がかかっている学生の単位を平気で落としてくる。

以前、僕も講義で少し喋ってただけで、単位を落とされた。

彼は東大を卒業して、海外の大学にも行き、名誉ある賞も地位も持っていた。

しかし、学生には嫌われていた。

「斎藤さんの講義今年は何としても受かりたいにゃ〜」

僕はため息をついていた。

しかし、隣に座っているラファエルは神妙な顔をしていた。

そして、ゆっくりとこう答えた。

「日本の皆さんは斎藤さんの悪口ばかり言ってマース。しかし、彼はとてもすごい人デース。どうして斎藤教授を批判するのですか？彼の知識や良いところを勉強すればイイデース。あと、嫌われているなら反面教師になるデース。」

彼のいうことはもっともだ。でもそんなこと言われてもニャー。

次の日、僕は朝、電車で大学へ向かっていると、この時間は三番目の車両にいつも斎藤教授が乗っていることに気がついた。そこで、勇気を出して斎藤教授いる車両に乗ってみた。

そして、とりあえず挨拶してみることにした。

「斎藤教授、おはようございます！」

彼はぎょっとした顔でこちらを見て

「お、おはよう」

と返事をしてくれた。

そして、講義の話していくうちにだんだん打ち解けてきた。

他の教授とも喋ってわかったことは、教授という人達はこちらから近づいていって素直に質問し話を聞けば、喜んで答えてくれるということだ。嫌がる人はほとんどいない。

そんなある日、夜京都の電車で斎藤教授がいた。

「こんばんわ！斎藤教授。」

僕の声にびっくりしたようだが教授は

「お〜坂本くんか。ちゃんと勉強しとるか？」

と少し飲んで酔っているようだった。

それから少し教授と話していたが、最後に教授は自分のことを喋り出した。

「私はなあ、研究のためならどんな努力もしたもんだ。昔は自分自身のためだったが、今では家族のため、企業のため、世界のために研究してきた。だけど妻と子供はそんな私を嫌って別のところに住んでいる。そうだ。学生たちも私のことを嫌っているのも知っている。適当に何にも考えず生きている今の学生たちに腹が立つんだ。そう思うだろ!？」

齋藤教授はヒートアップしてきた。

僕はそれにひるみながらも

「はい、そうだと思います。」

と答えた。

そして、最後に齋藤教授は寂しそうに

「坂本・・・私は孤独だ。」

と言った。

次の日、昨日の話のせいか、その日以来、齋藤教授は僕にあまり喋らなくなった。

弱みを握られていると思っているのだろうか。

僕は齋藤教授の話有谁かに言うつもりはないが、今年の齋藤教授の講義の僕の成績は、最高のA判定だった。

ただ、ラファエルも当たり前のようにすんなりA判定だった。

神様お疲れ様です。

京都

神社やお寺、風流豊かなその街は多くの人を魅了する。

涼しげな鴨川では、多くの人のがのんびり過ごしている。

花見小路では道に水を撒き、碁盤目状の狭い通路が冒険心をくすぐる。

京都のマイケルである京都タワーも悠々自適にそびえ立っている。

僕はそんな夏の京都の下鴨神社に後藤さんと来ていた。

「お前こんなとこ来て、そんな楽しいか？」

「どうでしょう。でもせっかく関西にいるなら、こういうの見ときたいじゃないですか？」

神社巡りは僕の小さな趣味だ。

なんというか、この神々しい雰囲気が好きなのだ。

ちなみに、今日は京都の夏の風物詩である古本市もやっている。

そこで面白い本を見つけるのもまた楽しい。

僕たちはとぼとぼ歩きながら、とりあえずお賽銭を入れてお参りした。

僕は御縁がありますようにと5円を入れ、後藤さんは1円を入れた。

「僕未だに神社とお寺のお参りの仕方の違いがわからないんですけど。」

僕はお参りしながら言うと、後藤さんは

「まあ適当でいいやろ？」

とあまり興味を示さず、全く宗教心が無いようだった。

「お前、いつもなにもお願いしてるん？」

僕は「えっ」とたじろいだが

「いろいろありますよ。」と答えた。

「例えば？」

「お金持ちになりたいとか。」

「ほんまに？」

「はい。」

そうすると後藤さんは、僕を見て

「お前、何でお金入れるか知ってるか？」

と聞いてきた。そう言われるとわからない。

「神様への貢物としてですかね。」

僕は適当に答えると後藤さんがやれやれという顔で言った。

「お賽銭箱入れに、浄財って書いてあるやろ？これ財を浄化する。つまり金銭欲をなくすって意味やねん。」

昔の人は、お賽銭にお金を入れることで金銭欲をなくす修業をしててん。それで修業すればするほど極楽浄土に行けるって話や。

それを金持ちなりたいて、本末転倒やで。ほんま。」

「そ、そうだったんですか？」

僕は自分の無知さに恥ずかしくなった。

「でもな、大体の人はこんなことも知らずに、お願い事いっぱいして、帰ってくからな。ほんま自分の都合ええことばっかお願いしおるで。

あと、もっとええお参りの仕方伝授したるか？」

後藤さんは神社の階段を下りながら言った。

「えっ、そんな方法あるんですか？」

僕は食いついた。

「この方法すると、願い事もっと早く叶うねん。」

「で、それどんな方法ですか？」

「1000円。」

「えっ？」

「いや、これすごい方法やから、情報量とるよ。」

「後輩からとるんですか？」

「じゃあ、教えない。」

後藤さんはなんて野郎だ。

「じゃあ、今日の夕食おごります。」

「・・・その方法はやな。

『神様お疲れさまです。僕は自分で自分の願いを叶えて見せます。』や。」

「・・・は？」

「いや、は？やあらへんがな。これすごいとこ突いてるで。」

僕は全く良くわからなかった。その僕の顔を見て、後藤さんが補足説明してくれた。

「いや、よう考えてみ？神様だって、みんなこれが欲しい。あれが欲しいって。自己中ばっかの奴の願い聞いて疲れとるで。

そんなときにやで。神様お疲れ様です。ってねぎらいの言葉聞かされたら、神様ぐっとくるで。

神様の心ぐっと驚掴みや。それで、自分の願いは自分で叶える謙虚さと自信。

もうこういう奴の願い一番に叶えたらうて思うで。」

そういわれると、そうだ。

僕たちは神様をどこか違う次元のモノと考えてしまって、彼らの心を無視していた。

「そんでなあ？やっぱり結局は自分の願い叶えるんわ自分やで。」

後藤さんはここぞとばかりのドヤ顔をしている。

まあ後藤さんの顔はさておき。

これは深いなあ。と思った。

今日の後藤さんは一段と面白いことを言っている。

もしかしたら、お賽銭に1円を入れたのにも何か意味があるのではなからうか？

「後藤さん。今の話とても参考になりました。でもお賽銭に1円を入れたのはどうしてですか？」

後藤さんはまた、「フッ」と意味深な顔をして言った。

「自分お賽銭に入れるお金って、どうなる思う？ただただ住職のポケットマネーになるんや。

田舎の神社とか寺ならともかく、世界の下鴨神社の住職なんて、超金持ちや。

やから1円くらいがちょうどええわ。あと俺、金銭欲なくそう思ってへんからな。」

「そんな理由ですか！？」

僕は、あまりの小もない理由にがっかりした。

でも

今日の話はとっても参考になった。

今日から僕も神社やお寺を巡るときは、神様にねぎらいの言葉をかけてよう。

そして、いろんな地方の神様たちに元気を与えられたらいいなあ

人間である僕にはおこがましいかもしれないが、そう思った

友達の数

その日、ラファエルは相変わらず一人で講義を受けていた。
よく考えてみたら、
ラファエルが誰かと一緒に講義を受けているとこや
お昼御飯を食べているところを見たことない。

たまに、違う国の留学生と英語で話しているところを見たくらいで
他はずっと一人だ。

僕はちょっと意地悪をして後ろから
「うわっ！」
と脅かして見せた。
彼は、少しビクッとしてこちらを見て
「なんだお前かよ」
とでも言いたげな表情をした。

「なんですか？坂本さーん。」
「いや、ラファエル友達いなくて、寂しそうやったから。」
僕は国際交流をしてあげて、なんて自分は良い人だろう
しかし、ラファエルは
「寂しくありません。あと、友達もそんなにいません。」
とムスツとして言った。

「でも、友達いっぱいいた方が、コミュニケーションがうまくなって、情報が集まりやすいつて
メリットがあるやん。」
僕は彼の大好きなビジネス風に言ってみた。

すると彼は、
「確かにそうかもしれませーん。でも、友達の数よりどんな人と付き合っているかということの
方が大切デース。
例えば、
パチンコばかりしている人たちと仲良くなったら、あなたはパチンコをするでしょう。
サラリーマンになりたい人と一緒にいれば、あなたはサラリーマンになるでしょう。
お金を無駄に使っている人と騒げば、自分もお金を無駄にしまいます。

坂本さんはそれでいいんですか？

知っていますか？

あるアメリカの調査で、親しくしている友だち5人の平均年収が自分の年収になると言われている。その原因は考え方が似てくるからだそうデース。」

「アメリカの調査とか言われると、反論しにくいやん。」

僕は言い返せずにいた。

「つまりはデース。友達をたくさん作って大切にすれば成功するではなく、優れた人と友達になり、大切にすれば成功するということデース。」

そうだったのか。

僕は、ところ構わず友達を作り、ワイワイすることが大学生の成功であり

周りに認められることだと思っていた。

でも

「でも、やっぱり友達がいっぱいいた方が、いろんな情報が入ってきて、思わぬ事態に助けられる。ワンピースで流行っている「仲間」ってやつ？そういうのどう考えてんの？」

僕はムキになって言った。

ラファエルは落ち着いた口調で

「一般的に友達が多い人のほうが成功しそうな気がしますが、実は友だちが多い人には金持ちは少ないデース。もちろん、そういう仲間は必要かもしれませんが、ただ、ところ構わず友達を作るのは良くないと思いきマース。」

僕は、自分の過去を振り返ってみた。

すると

趣味が合わないのに、無理矢理パチンコに行ったり

煙草を吸ったり

スノーボードに出かけたりもした。

嫌々一緒にいた友達もいた。

そう考えると、僕は本当に大切な友達がほとんどいないことに気が付いた。

「な、なんてこったい！」

僕は頭を抱えて、悩んだ。

僕が本当に仲が良いのは

彼女の華奈と先輩の後藤さんだけだ。

「どうしましたか？」

「僕には大切な友人が二人しかいないことに驚愕してる。」

「それなら、大丈夫デース。」

「えっ？」

僕は思わず聞き返した。

「何でも話せる親友なんて一人いれば、良い方デース。

何人もいる人は、それはただの友達デース。

友達の**100**人より親友一人の方がよっぽど素晴らしいデース。」

そうなのかな？

僕はすこしだけ彼に元気づけられた。

でも、待てよ。

こんだけ友達を選ぶラファエルがどうして僕とは喋るのだろうか？

「なあ、ラファエル。どうして俺とは友達っぽくしてくれるんだ？」

すると彼はこう答えた。

「僕からはいつも喋りかけてませんから、友達かどうかわかりませーん。

しかし、坂本さんは、きっと将来ビジネスで成功する気がしマース。

僕はあなたと喋るのは、そのためかもしれませーん。」

僕の一体どの部分に成功の要素があるのだろうか？

でも、ラファエルにならビジネスで利用されても良い気がした。

外国語は必要か？

「まさか、大学生にもなって普通に英語の講義があるとはなあ。」
僕は、頼杖をつきながら講義を聞いていた。

中学から義務教育で始められた英語。
そして、高校生になり、英語の文章は増えた。
文法も勉強した。
何度、「リピートアフターミー」という先生の言葉を聞いたことか。
それでも、英語ができるようになったわけでは全くない。
大学入学時に受けたTOIECは平均点。
しかも、TOIECができたからなんだと言うのだ。
英語喋れやんやん！

「I am learning English because I want to migrate to one of the countries in Southeast Asia someday！」

前の席で流暢な英語を喋っている生徒がいる。
そう。彼女は僕たちの学科で「チーム天才」と呼ばれている内の一人で
確か帰国子女かなんかだったと思う。
くそー
僕だって、海外に留学していたら英語ぺらぺらなのに・・・

キーンコーンカーンコーン・・・

講義が終わると、帰りにラファエルに遭遇した。
もちろんラファエルは
英語も日本語もラテン語も堪能で
合計5カ国語を喋れるらしい。

「なあ、ラファエル。
僕も海外に留学して英語が喋れるようになれば、ビジネスで成功してお金持ちになれると思うんだ。」

「そうなんですか？」

ラファエルは無関心そうだ。

「そうに決まってるやろ？これからはグローバル社会だから英語が喋れないと日本に埋もれてしまいそう。」

「まあ、確かに英語は必要なスキルデース。But it just is not good.」

ラファエルはようやく僕の方を見た。

「英語が話せれば、良い企業に就職できる。という学生はたくさんいまーす。でも、実際はそんなことありませーん。」

「えっ、そうなの？」

僕は驚いた。

「英語が喋れても、その人物が企業に必要な人材かが大事デース。例えば、英語ができてても仕事ができない人なら、クビデース。でも仕事ができる英語ができない人なら、通訳を雇えばいいだけデース。」

「通訳って。サッカーの監督じゃないんだから、ただのサラリーマンがそんなもの付けれるの？」

僕はそんな裏技があるとは知らなかった。

「私が言いたいのは、英語が喋れることよりもその人物が優れているかの方が大切だということデース。

あと、あなたは英語が喋れたらお金持ちになれると言っていました。

それは大きな間違いデース。もし、英語を話せてビジネスがうまくいくのであればアメリカ人は皆、大富豪になっているはずデース。

つまりデース。

金持ちになりたかったら、ダイレクトに資産構築につながるスキルを身に付け、それ以外の事はとりあえず無視した方が近道デース。」

「じゃあ、なんでラファエルはそんな外国語を覚えるんや！？」

「・・・語学は僕の趣味デース。いろんな人脈が作れマース。」

やっぱり、ラファエルには敵わない。

結婚

ピヨピヨ。

ピヨ！？

ピヨピヨピピピヨ！！

・・・

・・・ピ・・・ピヨ・・・。

山で鳥がよくわからない声で鳴いている。

そう。

ここは誰もが恐れおののく新潟県である。

新潟は僕の祖父母が住んでおり

親戚もみんな新潟だ。

妙高山に住んでいるおじさんの家は

冬になるとえげつないくらいの雪が降り

二階から家に入るといふ。

関西では考えられない光景だ。

僕はそんな地で親戚の結婚式に出席していた。

結婚式は物心付いてから初めて出席したため

色々と感動するところがあった。

僕もいつか結婚するのかしら？

でも、結婚すると女の人って性格変わりそうだなあ・・・。

「・・・というわけですよ。

女の人って結婚がゴールと思っている人多くないですか？

あと、結婚したら専業主婦になれるという理想をお持ちですが

今の時代、共働きしないと厳しいわけですよ。

ウェディングの語源である、「抵当に入れる」だって昔の話ですもん。

あと、子供ができたら、もう夫には関心がなくなり
お金はすべて子供への投資。
会社で働いていても、家族サービスしてくださいとどやされ。
『この俺に、温かいのは、便座だけ。』
という川柳も生まれるわけですよ。」

僕は、次の週に蒼井華奈と会って、結婚について語っていた。
でも、一般の人がイメージする結婚の話とは違っている。ダメな方に。

「それは、遼くんの考えであって、一般的じゃないわ。
まあ、結婚がゴールと考えてる女の人は何人か知ってるし。」

「そもそも、結婚という肩書きにこだわる必要はあるのか？フランスとかアメリカでは結婚せずに事実婚をしているカップルも増えてるやん。」

「それは、そうかもしれないけど。やっぱり女としては、結婚は憧れで、一度はしてみたいものなのよ。」

「そんな憧れだけじゃ。僕は納得しないよ。あと、婚約指輪が給料3ヵ月分とか結婚式の相場だって半端ないやん。」

「婚約指輪が給料3ヵ月分って言うのは、
宝石メーカーのデ・ビアズ社によるテレビCMがきっかけだから、全く気にすることないわ。ただの営業戦略よ。
あと、結婚式が高いのは、離婚させないようにするためよ。
再婚しようにもお金がなくなっちゃできないから。」

「華奈、結婚についてやたら詳しいやん。」

「まあ、女の子ならこれくらい知ってるわよ。」

「でも、結婚しないからこそ、楽しく、健康的に、仕事に打ち込めてお金持ちになりそうやわ。」

「そんなことはないと思うわよ？
日本の研究で結婚している男とそうでない男では、40~80歳で約2倍の死亡率なのよ。
あと、年収だって影響するんだから。
結婚していない男は、八割以上が年収**400万**以下なのよ？」

「そうなの！？結婚してない男の方がプレイボーイでお金持ってそんなイメージだったのに。」

「でも、結局は個人の自由だし、結婚しなくてもいいかもね。」

華奈はどこか寂しそうだった。

結婚が果たして良いのか良くないのかは僕にはわからない。

まず、そんな年齢でもないし。

だけど、「真の成功者は群れることなく、本当に大切な人とだけいる」

とラファエルが言ってたっけ。

もし、一人の女性だけ愛することができたなら

その人だけに、プレゼントを買ってあげ

思い出も積み重なって、

無駄な出費である風俗にも行かないのだろう。

まだ、遊んでいたい。

そんな欲望のために、人はお金も時間をも使ってしまう。

僕は、結婚する方が正しい気がした。

「まあ、時期がきたら結婚とかも考えてみるか。」

「うん。」

どこか二人の間に、恥ずかしい空気が流れた。

ついにこの日が来てしまった。

正直僕はビビっています。

一応、テラードシャツを着てホストっぽい格好をしてみたけど。

今思えば、後藤さんの

「お前なあ、ホストっていうのは女性を喜ばせるプロやねん。生きていく上でなあ、本物を見るっていうのは、めっちゃ勉強になるねん。偽物見ても勉強ならへんで。」

という言葉も、狂言にしか聞こえない。

あー・・・緊張する・・・。

そんなときに、待ち合わせ場所に後藤さんがやってきた。

「おいっす！」

後藤さんはなんて陽気な挨拶をするんだ。

僕はもう駅からドキドキしているのに。

「おい、何黙ってるねん。まさかお前緊張してんのか？」

相変わらず、鋭い観察力である。

「そら、緊張しますよ！しかも、ここは京都のド真ん中ですよ！こんなところで僕みたいなもんがホストやるとか狂気の沙汰ですよ！」

僕は、もう脇汗びっしょりだ。

「まあそんなこと言うなや。別に死ぬわけやあらへんし。かくいう俺もちょっと緊張してんで？まあ武者ブルいっちゅうやつやな。」

へえー・・・。

後藤さんでも緊張するんだ。ていうか

「ていうか、後藤さんで緊張するなら僕は緊張しすぎて死んでしまいますよ。てか死にたいです。」

僕は木村さんとの待ち合わせ場所まで歩きながら喋っていた。

木村さんとは、ここ京都でホストクラブのオーナーをしていて、僕らをスカウトしてくれた人だ。

木村さんとの待ち合わせ場所である京都のとある喫茶店に入ると、木村さんはすでに煙草を吸って待っていた。

「こんばんわ！木村さん。スカウトいただいた後藤と坂本です。」

後藤さんは率先して、挨拶していきなり明るい雰囲気になった。

こういうときの後藤さんは本当に頼りになる。

「おーやっと来たか。待ち合わせ時間10分前に来るとか礼儀正しいやんけ。」

それより早く待ち合わせ場所にいる木村さんは、さすがである。

彼は高そうなスーツと時計を着こなし、長い足をパツと組んで喋りかけた。

「そんで、いきなり本題に入るけどなあ。今日はキャッチをまずしてもらおうで。」

「キャ、キャッチですか？」

僕は自信なさげに答えた。

「まあ、キャッチゆうてもいきなり、客をホストクラブに連れてくるんはたぶん無理や。いくら俺みたいにカッコよくて口がうまくても、**100**人声かけて、ホストクラブ来てくれるんは**1**人いれば良い方や。」

後藤さんはそれを聞き

「それでは、僕たちは一体どのようなキャッチをすればいいんですか？」

と質問すると木村さんは煙草を消し、立ちあがって言った。

「よし、とりあえずここで話すのもなんやから、外いこか。」

昼の京都は、一般庶民の穏やかな人たちで賑わっているが、夜になると雰囲気ががらりと変わる。

飲み会終わりの学生、金持ちのおじさま方、キャバ嬢、ホスト、風俗。
そんな猛者だらけの街に今から繰り出すのだから笑いものである。

たくさんの人が行き交う交差点で、木村さんは立ち止まって言った。
やはり、木村さんもビジネスマンである。
どこか気の抜けない雰囲気漂っている。

「じゃあ、最初の課題はやなあ。誰でもいいから女の子と握手して来い。」

後藤さんと僕はキョトンとしながら、目を合わせた。

「あ、握手ですか？」

「よし、まずは先輩の後藤。お前が行って来い。」

後藤さんは

「はい、とりあえず握手してみせます。」

と飲み込みが速く、颯爽と人ごみに繰り出していった。

僕は本当にうまくいくのだろうか？と思いながら後藤さんを見守っていた。

後藤さんはギャル系の女の子を見つけ、果敢にアタックしている。
でも、女の子は立ち止まらずそのまま去って行った。

木村さんと僕の二人で、その後藤さんの様子を見てると木村さんが僕にこう言った。

「まず、女の子を立ち止まらせなあかん。やから、横に立つんやない。真正面に立って、無理矢理止めるんや。立ち止まったらちゃんと話聞いてくれるねん。」

僕はそんな大胆に行動できるのか不安になってきた。

後藤さんは三度目アタックである清楚なお姉さんからようやく握手をしてもらえた。
あの後藤さんでも握手だけで手こずっている。

後藤さんは

「いやー、ナンパって難しいですね。喋るだけでも難しかったです。」

と喋りながら木村さんと僕のもとへ帰ってきた。

木村さんは

「でも、三回目で成功したんは上出来や。さすが、俺がスカウトした男や。飲み込みが早い。」と後藤さんを褒めた。

ホストは人を褒めるのがとてもうまい人種だ。というよりもそれが仕事でもある。

「じゃあ、次は坂本や。行って来い。」

「は、はい！」

僕はとても緊張している。

できることなら帰りたい。

まず、キャラ違うだろ。

僕DQNじゃないし。

今まで女の子と喋ったことなんかそんなに多くないよ。

そう思いながらも、やるしかないと腹は括っていた。

人ごみの中で、女の子を見定め、僕はとても綺麗で大人びた黒髪の女性に目を付けた。

よし、あの子に喋りかけよう。

喋りかける言葉も決めている。

そして、木村さんの言った通り、彼女の横を追い越して、真正面に立って言った。

「あの一。お願いがあるんですけども今いいですか？」

女の子は誰だよという目で見ている。でも僕も後には引けない。

「先輩とかとゲームして、罰ゲームで握手して来いって言われたんですけど、良いですか？」

そう言って、僕は女の子に手を差し伸べた。

女の子は小さい声で「はい。」と小さくすくす笑いながら僕と握手してくれた。

僕はその出来事に感動して、大きな声を出した。

「ありがとうございます！」

その後、女の子は足早に去っていったが、僕は彼女に手を振ってあの子可愛かったなあ。と心躍らせながら見送った。

僕は、木村さんと後藤さんのもとに歩いて戻り、

「とても緊張しましたが、その分、達成感がありました。あとちょっとメンタルが強くなりました。」

と笑顔で答えると

木村さんも笑顔で

「一発で握手に成功するとは、お前はすごいなあ。むしろ俺が教えてほしいくらいや。」
と言ったが、僕は照れながら

「いや、そんなことはありませんよー。」と答えた。

キャッチは思ったより面白かった。

それは木村さんに褒めて貰え、緊張感が解けたからだと思う。

あからさまなお世辞は、かえって逆効果になるなどと言われているが、それはウソだ。たとえお世辞であると分かっても、褒められれば嬉しい。

そんな僕の様子を見て、木村さんが言った。

「いいか？ホストの基本を教えたる。

相手のことはいくら褒めても、褒めすぎることはない。ってな。」

これが後藤さんの言っていたプロから学ぶということか。

そのまま今度は、実際にホストクラブで接客をすることになった。

いや、待て。

全然そんなのやり方わからんやん・・・。

そのホストクラブは新しくできたばかりで
とても綺麗だった。
何を隠そう、木村さんは最近独立してオーナーになり
今日はそのオープン前だった。

「よし、もうすぐすると、俺の客が来るからそこのヘルプとしてお前ら座っつけ
最初は、ただ客と話をすればいい。
やり方は見て覚えろ。」

木村さんはなんと無茶なことを言うのか

僕と後藤さんはお互い目を合わせて
「いや、いきなりすぎやろ・・・」
とアイコンタクトした。

とりあえず、ライターの付け方と
お酒の注ぎ方を教えてもらって
そうしていると

カランコロン

と音がして、最初のお客さんが来た。

「よう！いらっしゃい！」

木村さんはとても親しそうに
30代くらいの女性を迎え入れた。

「久しぶり～！瑠偉斗。あなたがオーナーになって、私が最初のお客ね。」

そう。今日はオープン前ということで
木村さんが親しいお客さんだけを呼んだのだ。
ちなみに、瑠偉斗は木村さんの源氏名で
お酒のルイ13世からきているらしい。

「やっぱり、最初にお前を呼ぼうと思ってな。」

木村さんがエスコートする女性は
良く見ると、とても金持ちそうだ。

そして、木村さんはその女性に
僕たちを紹介してくれた。

「あなたたち、この世界は表の世界と違って、光と闇があるけど
その世界を見て、社会に出るってのは悪くないと思うわ。
頑張っってね。」

「は、はい！有り難うございます！」

僕と後藤さんは彼女のオーラに圧倒され
新たな世界の一面を見たような気がした。

僕たちは、お客さんであるユリさんの近くに座り、
彼女と木村さんのやり取りを聞いていた。

話を聞く限り、話の内容は
夫がどうか、化粧の話とか、たまに下ネタをはさんだりと
言っちゃ悪いが小もないことばかりだった。

でも、木村さんをよくよく観察していると、
煙草を出したら、すぐ火を付けたり、お酒をすぐ注いだり、
相槌と笑顔を欠かさないなど

細かいことに気を付けているように見えた。

一通りのやり取りが終わると、木村さんとユリさんが
こちらを見て、僕たちに話を振ってくれた。

僕と後藤さんは、あたふたと、ぎこちないながら、必死に会話をした。

「まあ、そんな気張らんでええで。
それより、何か俺ら見て気づいた点ないか？」

木村さんがそんな問題を出すものだから、
さらに、僕たちは「えっ！」
と気張ってしまったが、

僕は勇気を振り絞り、

「木村さんが細かいところに気を付けている点と、あと、ユリさんが美しいことですかね。」

と言い、一瞬空気が止まった。

僕は、すべったかと思い、冷や汗をかいたが
ユリさんは
「あはははは。そんなことは誰でもすぐ気が付くわ。」

と笑ってくれたので、助かった。

「まあ、ユリが綺麗なんに気が付くのは、誰でもできるけど、
細かい気配りってのは、いいところに目がいてると思う。」

「そうなのよ。人間関係で最も大切なことは、細かいことにあるのよ。
これは夜の商売だけの話じゃなくって、表の世界でもそうなの。」

木村さんとユリさんは二人で笑いながら答えた。
そして、木村さんが改まって、僕たちを見て言った。

「俺達の間人間関係を決めるんは、取っ組み合いのけんかをしたとか、大切な約束をやぶったこと
やない。

本当に大切なんは、挨拶をするとか、返事するとか、笑顔でいるとか、電話するの忘れてしまっ
たとか、悪い冗談言ってしまったとか、誰かの誕生日覚えてあげるとか。

そういう小さいこと気を付ける方が、ほんまは大事やねん。

大きな間違いは誰でも気をつけよう思うけど、細かいことって疎かにしがちやからなあ。このことは、常に頭に入れておくんやで。」

「は、はい！」

僕は、これは大切なことを聞いたと思って後藤さんを見ると後藤さんもそう思っていたらしく、目が合った。

「まあまあ、そんな固くならないで、今日はわいわい飲みましょう！」

ユリさんは素敵な笑顔で、グラスを持ちあげて乾杯をした。

お客さんがユリさんだけで、しかも、かなり上品な方だったので楽しくお酒を飲むことができた。

意外と、ホストって簡単なんじゃないか？

そう思い始めていたのだが・・・。

カランコロン

「瑠偉斗～、遊びに来たよ～！」

いきなり若い声が入口から聞こえてきた。振り向くと若いギャルが三人もやってきたではないか。

すると木村さんも口調を変えて「みんな会いたかったよ～」
と言い、そして、小声で僕たちに「この席は頼んだで！」
と言って向こうへ行ってしまった。

「ホストにはね。ああいうお水の若い人も来るのよ。」

ユリさんは木村さんが席を立つとどこか寂しそうだった。

それでも。木村さんの力には及ばないが
後藤さんも相当面白い人なので
向こうの席に負けじといろんな話をして盛り上がった。

向こうは向こうで
「今日、おやじが立ちバック強制してき、入らなんちゅうねん！」
など、お水ならではのトークをしていた。

僕はそんな光景をテレビの世界でしか見たことがなかったので
実際に、こんなところにいる自分が信じられなかった。

話を聞いていると、
「おやじ死んじまえ！」とか「先輩の〇〇、ほんま乳〇黒いねん！」
などと悪口ばかり言っていたが
木村さんは
「よっ！その通り！」とか「ほんま俺もそう思う。」
など絶対相手のことを否定しないことに気が付いた。

そんな僕の視線に気が付いてか、ギャル軍団が
「瑠偉斗～、あいつらなんなん？」
と僕たちにガン飛ばしてきた。

「俺この店オーナーするのに、あいつらスカウトしてきてん。」
と僕たちを紹介したが
彼女たちはなぜか僕たちが気に食わないらしく

「ちょっとお前ら、こっち来い。」

と言われた。
ユリさんを見ると、彼女も無言で首を振って向こうに行きなさいと合図をしたので
僕たちはそろりそろりと彼女たちの席に行った。

席に着こうとするといなや

「おい、まず、名前名乗るのが礼儀やろ！」
とどやされた。

ひ～。そ、そんなこと習ってないよ・・・

と僕は顔面蒼白していたが、後藤さんが

「すみませんでした。瑠偉斗さんにスカウトされた雅治です。どうぞよろしくお願いします。」

とホストらしく挨拶したので、

さ、さすが後藤さん！ナイス！

と思って、続いて僕も

「え～。同じく瑠偉斗さんに紹介された・・・」

「いや、お前には聞いてへん。」
とギャル1に遮られた。

え～！僕が一体なにしたって言うんだい。。。

「で何してる人なん？」
ギャル2が質問してきた。

「僕たちは大学生で、この世界のことを知ろうと思い、ホストをやることにしました。」
後藤さんは相変わらずしっかりしている。
ナイス後藤さん！

「じゃあ、年齢はいくつなん？」
今度はギャル1

「僕が21歳で、隣のこいつが20歳です。」

「みんな似たような年齢なのね。」
ギャル3は天然系でおっとりしている。

ギャル3がいることで、この三人はバランスが取れているのだろう。

「てか、ホストあんたらやれるんか？今だって、うち自分でお酒ついであるで。」
いつの間にかギャル1は自分でお酒を作っていた。

「あんたらうちらが客やで。これやったらあんたらが客やん。」
ギャル2も追い打ちをかけてくる。

ギャル1

「うち18歳でこの世界は入ったけどなあ。この世界ほんまに厳しいで。

ギャル2「てかあんたまだ18やんけ。」

えっ！18歳！

僕らより年下やのに、
なぜか僕、説教されてるし・・・

「てかよ、てかよ。そんなことより、お前さっきから何黙っとるねん！ちょっと立てい！」
と僕はギャル2に指を差された。

ひ～。誰か助けてください。

木村さんが

「まあまあ落ち着けて。」
と言うかいもなく。

知らぬ間に、僕はギャル2に顔面をストレートで殴られていた。

僕は急な出来事で、何が起きたのか分からず、ただただ、顔を抑えていた。

木村さんは、

「ちょっとお前ら酔いすぎやって、こいつらよりも俺とカラオケでもしようや。」
とフォローかアンフォローかわからないが
彼女たちを引き離そうとした。

ギャル1は顔を抑えている僕に向かって

「あんたホストは顔が命やで。しっかり守らんかい！」

となぜかまた怒られた。

でも僕は途中、何度か言い返そうと思ったが、それは得策でないと思いなおし、言いたいことを残らず言わせた。

一悶着が終わり、僕と後藤さんはユリさんのもとへ返ってきた。

僕は言い返せなかった自分が悲しくて、落ち込んでいると

ユリさんは

「あなたよく言い返さなかったわね。本当に偉いわ。」

となぜか褒められた。

「そんなことはありません。年下の人に言い返せず、僕ほんとダサいです。」

すると、またユリさんは

「そんなことはないは、水商売っていうのは言いかえれば、ストレス発散の場でもあるのよ。彼女たちは汚いおじさん相手に、身体を売って、相当ストレスが溜まっているのよ。そのストレスを受け止めてあげるのがあなたたちの仕事よ。」

僕は自分の行動が正しかったのかと思うと少しほっとした。

それと同時に、彼女たちも色々大変なんだと同情してしまった。

「みんなそれぞれ悩みを持ってるの。そのストレス発散の場所が、サラリーマンなら風俗女。風俗嬢ならホストと流れていくの。これはお金の流れとも一緒よ。」

「はい！わかりました。ところで、ユリさんも何か悩みがあったりするんですか？」

後藤さんがプライベートな質問をぶつけてきた。

「そうね。私、夫が会社の社長なんだけど。全然かまってくれないの。だから、話し相手を求めているのかしら。いくらお金を持っていても私は今幸せじゃないわ。」

夫のおかげで、お金と幸せは比例しないって知ったわ。」

ユリさんの闇もまた深そうだ。

「じゃあ、瑠偉斗帰るね〜！」
ギャルたちは万札をばらまくと

「諭吉シャワーで、サッパリ。」
と木村さんは小もないことを言った。

地面に落ちている諭吉たち。
この人たちはお金を何だと思っているのだろうか……

しかし、ギャルたちには色々言われて、正直凹んだんあ。

「まあそんな落ち込まないで。」

ユリさんが優しく言ってくれたが、
脳裏に

「あんたら、
うちらが客やで。これやったらあんたらが客やん。」

という言葉に、ハツとなり、

「いえ、大丈夫です！」

と咄嗟に応えた。

「ふふっ、無理しちゃって。じゃあ、特別に私からちょっとやそっとじゃ凹まないスキルを教え
てあげるわ。」

そう。お水の世界ではメンタルも鍛えないと生きていけないのだ。

「それで、そのスキルというのは？」

後藤さんも興味津々に聞いてきた。

「そ・れ・は、常に視野を大きく持つことよ。」

「し、視野ですか？」

僕はあまりよくわからず聞き返した。

「そう。視野。バードビューって心理学では言うみたいだけど、
鳥が空を飛びながら地上を眺めるように、
自分がいる状況や起こっている自体を、客観的に考えるのよ。」

僕と後藤さんはお互い目を合わせると、後藤さんもまだいまいちわかっていないようだ。

「まあ、ちょっと、待って。たとえば、例えばよ？」

『なんでこの人はこんなことを言うんだらう？』

とか

『なんでこの人はこんなことをするんだらう？』

って考えるのよ。

さっきの子たちが、遼に文句を言ったのは、
おじさんたちでストレスが溜まって、その鬱憤を晴らすために言ったのよ。

ということはよ？別に遼が悪いわけではないのよ。

そもそもホスト初めての人がちゃんと接客できるわけないもの。
それはあの子たちもわかっていたと思うわ。」

ユリさんの言葉に、僕は

「そういわれるとちょっと救われます。」

とホッとした。

そして、後藤さんが

「つまり、相手の発言を言葉通りストレートに受け止めて感情的に処理すると、ネガティブな気持ちになってしまうから、そうではなく、相手の言葉を一つの情報として置き換えて、分析するってことですね。」

とまとめた。

「そうよ。あなた頭良いわね。」

「い、いえ、そんなことは・・・。」

後藤さんは少し照れているようだ。
こんな後藤さんはなかなか見れない。

僕も負けじと、

「つまり、頭の中でキーボードをたたいて、相手の発言を書きだしてテキスト化するようなイメージですね。」

と上手いこと言ってみたつもりだったが、

「うん。まあそんなうまく言い直さなくてもいいのよ。」

と三人で笑って、その場は和やかな空気が流れた。

気が付くともう明け方で外で
ハトが「トゥットゥルー、トゥットゥルー」と鳴いている。

「よっしゃ、あいつら帰ったから、これにて閉店にしようか！」

木村さんが煙草を吸いながら、笑顔で話しかけてきた。

僕は、あっという間だったと思うと同時に、
なんと濃い時間を過ごしたのだろうかとも思った。

気が付くと、脇は汗びっしょりで、精神的にかなり疲れていた。

「とりあえず、雅治と遼、こっち集合や。」

木村さんはドスッと椅子に座り、ため息をついて言った。

「フー。どうやった？夜の世界は？」

少し間を置いてから後藤さんが口を開けた。

「僕たちの知らない世界でとても面白かったです。」

という、便乗して僕も

「僕も面白かったです！」

と答えた。

「そうかそうか。それは良かった。で単刀直入に聞くけど。ホストやらへんか？」

いきなりの質問に僕はたじろいだ。

確かに、給料もいいし、仕事も面白そうだ。

でも、大学の授業とかサークルとか行けなくなるなあ……

それはそれで、寂しい。

正直ぼくはホストをやるかやらないかどちらが良いかわからない。

ここは……ここは彼に任せよう。

「ジー……」

僕は後藤さんを凝視した。

後藤さんは

『うわっ、なんやこいつ。きもっ！』

っとリアクションをしたが、僕のアイコンタクトが通じたらしく

重い口を開いた。

「一日考えさせてください。それで連絡があれば、雇わさせていただきます。でも、連絡がなければ、辞退させていただきます。」

後藤さんは、こんな重い空気の中、言いきった。

さすが、頼りになる後藤さん！

「遼もそうか？」

木村さんがこちらに顔を向けると、僕はウンウンと素早く首を振った。

「そうか・・・早い返事期待しててんけどなあ。」

木村さんは少し寂しそうに言った。

「まあ、ホストっていうのは世間から見たら、あまり良い印象がない職業や。そんで親とか友達は言うやろうなあ。『なんでホストなんかするの？』って。

周りはみんな勉強して、ええ大学入って、大きい企業に就職して、次は結婚しなさい。って言うやろうな。

でも考えてみたら、そいつらの考えって

『なんでたくさんの人がやっていることを、お前はしないの？』

ってことやん。

こいつらはだいたい思考が停止してるねん。

なんでその反対の

『みんなと同じことをする必要があるのか？』
っていうことを成り立つことがわかってへん。

人生決めるんは親の意見でも友達の見解でも世の中みんなの見解でもない。自分や。」

木村さんはいつにもなく熱く語っていた。

僕は木村さんの話に、少し感動し、涙でも浮かべそうになっていた。

今度は、ユリさんが喋り出した。

「表の世界の人達って、裏の世界の人を見下す傾向にあるのよ。

『なんでこんな若いのに働かずに、身体を売っているのか。』

『酒飲んでではしゃいで、頭悪いなあ。』とか

そんな中、水商売を続けるってとっても大変よね。」

木村さんはユリさんの言葉に頷きながら答えた。

「そやなあ。確かにホストははみ出し者かもしれん。

でも、『身体売ってでも叶えたい夢がある。』、『酒で内臓壊しても叶えたい夢がある。』

俺は、「他人がやっているから」って適当に人生過ごしてる奴より、

よっぽどそいつらの方がすごいって思う。

やから、ホストやるかやらんかはどっちでもええ。

世の中の大きな波に流れるな。多数派が正しいと思うな。

お前らは自分のやりたいことをするんや。

夜の世界の住民は、そんな奴らばかりや。

もっといろんな世界を見て、悩まず突き進んでくれ。」

後日・・・

「後藤さん、後藤さーん！起きてください！」

大学のキャンパスの片隅で後藤さんはベンチで寝ていた。

「おおーなんやお前、元気やなあ。」

「なに言ってるんですか！もう講義始ってしまいますよ！
再履修で後輩と同じ講義とか恥ずかしくないんですか？」

後藤さんは、よっこらせと腰を上げて遠くを見て言った。

「今日は講義受ける気分やないなあ。」

僕たちはあの裏の世界を味わってから、二日経っていた。

「また、そんなこと言って！でもよかったんですか？ホストやらなくて？」

そう、後藤さんは木村さんに連絡を入れなかった。つまり、ホストを辞退したのだ。

「まあいろいろ学べたし、最後に木村さん言ってたやん。いろんな世界見ろって・・・。
」

「はい。確かに言ってましたけど、それが何かあるんですか？」

僕は講義が始まるのも忘れ、ベンチに座っていた。

「いろんな世界って、夜の世界とかもあるけど、やっぱ日本じゃない・・・海外や。
というわけで、来月の夏、一緒に海外行くぞ！」

...

・・・！？

「えっ。今、一緒になって言いました？」

「そや。まあお前とおれは二個一みたいなところあるからな。
とりあえず、カンボジアあたりに行くからよろしく。」

この人むちゃくちゃだー！

ラファエル童話を作る

大学の講義を受けていると、前の方でラファエルがずっとノートをとっている。

相変わらず勉強熱心だなあ・・・

キーンコーンカーンコーン

講義が終わってもラファエルはノートをとっていた。

僕は気になって、ラファエルに近づいた。

「できました！」

ラファエルがいきなり大きな声を出すので僕は驚いた。

「坂本さんいたんですか？」

ラファエルは相変わらず冷たい。

「ところでラファエル、一体何やってたの？この講義そんなノートとることあった？」

僕が聞くと予想外の解答が返ってきた。

「いえ、童話を書いていました。」

こいつ変態になってしまった。

そんな目をしていると、ラファエルは

「坂本さん、少し読んでみてくだサーイ。」

僕はその童話というモノを読んでみた。

雄大なモンゴルの草原で、ウマ達がニンジンを食べていました。

ポリポリと。

ウマA「あー・・・ニンジンうめえ。」

ウマB「今日もメシウマやなあ」

ウマC「いい天気だ」

ウマD「そうだな」

そんな会話をしながら。

人間「じゃあ、そろそろ行くぞ！」

ウマA「ヒヒーン。もう行くのかよ・・・」

ウマB「足がまだ疲れたままなのに・・・」

そうして、ウマ達は人間と重たい荷物を背中に乗せ、
何万キロも大移動を繰り返していました。

そんなある日。

ウマA「イタッ。」

ウマC「おい、大丈夫か？」

ウマA「足が急に痛くなった・・・」

ウマB「めっちゃ腫れてるやんけ！」

ウマD「これは疲労骨折っぽいな。」

人間「なんだ、このウマ。全然動かなくなったぞ。おい、早く動け！」

ウマA「ヒ、ヒヒーン！（僕を蹴らないでよお）」

人間「しょうがねえなあ。こいつは足手まといだ。ここに置いていこう。よし、お前ら行くぞ！」

ウマA「そ、そんなあ！僕はどうしたらいいんだよ！」

ウマB「骨折した自分が悪いんやで。」

ウマC「ご、ごめん・・・、ご主人様についていかないと僕、生きていけないんだ。」

ウマD「・・・」

ウマA「おい、みんな待ってくれよ——。」

こうして、ウマ達はウマAを後にして、人間とともに、別の地域へ移動しました。

その夜。

ウマB「しかし、あんな光景見たら、俺しっかり健康管理せなあかん思うわ。」

ウマC「でも、こんな生活続けてたら、いつかウマAみたいになりそうだなあ・・・」

ウマD「そもそも僕たちは何でこんな生活をしているんだ？」

ウマB「そら、こうやってご主人様に仕えてへんと、ニンジンもらわれへんやん？お前も見たやろ、ウマAを。ああやって、動けんといたら、俺らは食料にありつけへんで死んでまうんや。」

ウマD「もし、自分たちで食料を見つけることができたら、こうやって体力を使わずに自由に生きていけるのに。」

ウマC「仮に、食料を見つけて自由に生きていけるとしても、そんなうまいこと行かないよ」

ウマB「そやそや。ご主人様に仕えてたら、とりあえず、食料はもらえるんやし。てかニンジンうまっ。」

ウマD「・・・」

次の日、今日はウマ達の休息日である。

ウマDは何か自由に生きていくための糸口を考えながら、散歩をしていた。

ウマD「そもそも、ご主人様はどうやってニンジンを手に入れているのだろうか？そういえば、休息日にご主人様はいつもどこにいらっしゃるのだろうか？」

そう思った、ウマDはご主人様を観察することにした。

ご主人様はあたりを見渡し、黒い土の肥えた場所へ歩いていった。

人間「あった、あった。これだけニンジンがあれば、ウマ達もまた長いこと働いてくれるだろう。」

その光景を遠くで見ていたウマDは、ニンジンが黒い肥えた土地に存在することを知った。

その夜。

ウマD「ニンジンが黒い肥えた土地にあるんだ。だから、ここを抜け出して、そこを目指せば自由に生きていける。」

ウマC「ほ、ほんとに!？」

ウマB「うそつけ!そんなうまい話誰が信じるか!」

ウマC「でも、ウマDの言うことが本当なら、僕思い切って、この生活から抜け出したいなあ。」

ウマB「お前らほんまあほやな。まあええ。お前らの好きなようにしたら?死んで戻ってくるのが目に見えてるけどな。」

次の日、ウマCとDは御主人様のもとを去り、ニンジンのある土地を目指した。

その足取りは軽く、ご主人様に仕えていたときよりも、早く走ることができた。

そのせいもあってか、ウマCとDは早くもニンジンを見つけることができた。

一方、ウマBは

ウマB「あいつらアホやな。こうやってちゃんと働いてたらニンジン食えるのに。てかニンジンうまっ!」

人間「・・・そろそろ、ニンジンがなくなってきたなあ。このままウマBにニンジンを与えていくと、俺が食うものがなくなっちゃう。もう、目的地にも近いし、ウマBを捨てるか。」

翌朝。

ウマB「ふうーちょっと筋肉痛やけど。今日もニンジンのために働くか。ってあれ？なんでご主人様がおらんのや！？毎日、ニンジンくれたやん！？俺これからどうやって生きていったらええの・・・」

そのころウマCとウマDは・・・

ウマC「何も働かずに、ニンジン食べれるとか本当に幸せだ！ウマDを信じて良かった。」

ウマD「僕もここまでうまくいくとは思わなかったよ。（でもそろそろニンジンが尽きてきたなあ。）」

次の日。

ウマC「今日もだらだらしながらニンジン食べるか。あれ？ニンジンがないぞ？」

ウマD「予想していたことが起こってしまったなあ。」

ウマC「うわぁー。急にニンジンがなくなってしまった！どうしたらいいんだ！」

ウマD「・・・まあ急ではなかったけど。でも、肥えた土地がまだあるんだから何とかして、ニンジンを作れないかなあ。」

ウマC「何とかってどうするんだよ！」

ウマD「それはまだわからないけど。とりあえず次の土地を目指そう。」

ウマC「僕は嫌だ。探すの大変だし、もし、土地が見つからなかったら、死んじゃうじゃないか。」

ウマD「でもここにも食料がないから同じじゃない？」

ウマC「違う。ここには肥えた土地がある。だから、きっとニンジンはまだ生えてくる！」

ウマD「君がそう言うなら無理強いはしない。僕は行くよ。」

ウマC「そうか。でもウマDにはお世話になったから、いつでもここに戻ってきていいよ。その時にはニンジンも分けてあげる。」

こうして、ウマDはまたニンジン探しの旅に出ました。

しかし、今回はなかなか土地は見つかりません。

ウマD「やっぱりウマCの言うとおりに、あの土地にとどまっていればよかったかなあ。。。」

ウマDはそう思うと、ついに動けなくなってしまいました。

そんなとき、ある一匹の動物がこちらへ近づいてきました。

???「どうしたのウマさん？」

ウマD「ニンジン探しの旅に出ただけだけど、ニンジンが見つからなくて、元気をなくしてしまったんだ・・・」

???「そうなの。ニンジンって探すのって大変よね。」

ウマD「ウサギさんもそうなんだ。」

ウサギ「でも、私たちはニンジンを探さなくても大丈夫よ。」

ウマD「どういうこと？」

ウサギ「私たちはニンジンの作り方を知っているの。私についてきて！」

そういうとウサギはぴょんぴょんはねて走った。

さっきまで、動けなかったウマDも希望の光が見え、全力で走ってついていった。

行きつく先には、一面のニンジン畑があった。

ウサギ「私たちは、ニンジンの種を黒い肥えた土地に植え、水を与えてやることで、ニンジンを作っているの。」

ウマD「でも、ニンジンがなくなってしまったらどうすんだい？」

ウサギ「そうすると、この土地にまた種を植えて、別の土地に行くの。そして、またその土地のニンジンが無くなったら、そこに種を植えて、また別の土地へ。それを繰り返して、最初に種をまいた土地にはニンジン畑ができていくわ。」

ウマD「そうなんだ。ありがとう！うさぎさん！僕帰らなきゃいけない場所があるんだ。」

ウサギ「そう。またいつでもいらっしゃい。」

ウマDはニンジンとその種を持って、ウマCのいた土地に戻ることにしました。

ウマD「ニンジン育てることができれば、今度こそ自由に生きていける。」

ウマDは期待に胸を膨らませていました。

しかし、戻ってみると、そこには横たわったウマCの姿が

ウマD「ウマC！ニンジンを見つけたよ！あと、育てる方法も教えてもらったんだ。今度こそ僕らは自由だ！」

ウマC「・・・ウマDか。僕はもうダメみたいだ。やっぱりニンジンは生えてこなかったよ。こうなるならウマDの言うことを聞いていればよかったね。でも、ご主人様のもとを離れられたこと、本当に良かったよ。ありがとうウマD・・・。」

ウマDはウマCのお墓を作ってやりました。

ウマDはこれらの教訓を胸に、たくさんのウマ達にこの知識を教えてやりました。

今では、ニンジン畑のオーナーです。

たくさんのウマ達が幸せにニンジンを作っています。

ウマCのお墓の目の前には一面のニンジン畑ができました。

ウマDはそこで幸せに暮らしました。

おしまい。

「なんか知らないけど、心に来るものがあった。」

僕はあまりのできに、驚いた。

「そうですか。よかったです。この話は労働者に当てはまりマース。坂本さんもウマA、B、Cのようになりたくなければ、ビジネスのこと勉強してくだサーイ。」

「は、はい。わかりました。」

ラファエルは満足そうに帰って行った。

勝つか学ぶか

「あー最近、全然麻雀勝てないなあ・・・」

僕は、学校の食堂で、ぐで一んとしながら言った。

「ふーん。いいことやん。」

華奈はこちらを見ずに、紅茶を飲みながら外を見ていた。

麻雀の話には興味がないようだ。

「女の子には、勝負の世界って言うものがわからないのか？」

僕はまだぐで一んとしている。

「勝負って何よ。ただのギャンブルじゃない。ギャンブルする人なんて嫌いです。」

どうやら、麻雀に興味がないのではなく、ギャンブルをする男に興味がない様子だ。

「まあ、華奈ってそういう『勝ち負け』の世界にいるイメージがないもんなあ。」

「そもそも『勝ち負け』って考えが、好きじゃないわ。」

ようやく華奈はこちらを向いた。

食堂は、今日も学生がたくさんいて、みんな一様に喋っている。

そもそも華奈はこの大学の人ではないのだが。

「いやいや、世の中生まれたときから、勝負の連続やったやん。小学校では50mで速くて、ドッチボールが強い奴がモテたし、中学ではいじめるかいじめられるかの世界。高校でははや、受験戦争。社会人になったら、出世争い。はあ僕たちはいつになったら勝負の世界から抜け出せるの
だろう・・・。」

僕はたまに、生きていくのがしんどくなるときがある。

それは、無理矢理、勝負の世界に巻き込まれ、勝ち組と負け組にカテゴライズされるときだ。

どうして、人は勝ちと負けに分けたがるのだろうか？

やっぱり勝ち組に入りたいが、それはとても大変だ。といって負け組に入るのは、世間が認めてくれない。

僕はこの長い勝ち負けの生活からいつ抜け出せるのだろうか。

「やっぱり、遼くんの考えは間違ってる。」

今日の華奈は、どうも食い下がらない。僕が麻雀をしているせいだろうか？

「じゃあ、どう間違ってるのさ？」

僕は華奈をじっと見た。

「私だって、昔は勝ち負けにこだわったわ。ピアノの大会では一番になることにこだわったわ。でも、負けてしまったとき、悔しくて、一番になった人に嫉妬したりして、愚痴まで言って。そんな自分が嫌になった。そういうのもう疲れちゃったの。」

僕のその気持ちはよくわかる。

僕だって、嫉妬するし、悪口も言う。でもそういうのって疲れるんだよなあ。

「だから、私は負けてもそうならないように、学ぶことにしたの。」

学ぶこと？

最後の香奈の言ったことがよくわからなかったので質問した。

「学ぶってどういうこと？」

華奈は一旦喋るのをやめて、紅茶を飲みほし、こちらを向いて言った。

「勝って得られるものって大きいけれど、負けから得られるものってそれ以上大きいよ。だから、負けて感情のままに悔しがらなくて、どうしてこの人は強いのだろう？って勉強するのよ。そうすれば、嫉妬もしないし、悪口も言わなくなる。だから、勝つか負けるかじゃなくて、勝つか学ぶかなのよ。」

「勝つか学ぶか。なんか新しい考え方やなあ。」

この考えは、失敗から学ぶことに似ている。

人は多くの失敗から学んできた。

エジソンの「失敗なんかしちゃいない。うまくいかない方法を七百通り見つけただけだ。」はその考え方が出ている有名な言葉だ。

そして、僕は思った。

「負けてなんかいない。ただ、負けない方法を学んだだけだ。」

「えっ？」

華奈はキョトンとした。

「俺は麻雀に負けていない。学んだだけだ。そう、勝つか学ぶかだ。よし、明日も徹夜で勝負や！」

「はあ、麻雀は勝負とかじゃない、ギャンブルでしかないわよ。」

華奈は席を立ち、呆れた顔をして、食器を棚に戻しに行った。

ビジネスを始める

あーしかし、お金がないなあ。

カンボジアに行くって言ったって、10万くらいはいるよなあ。

僕は、後藤さんと旅行に行くためのお金を何とか捻出しようとしていた。

なぜカンボジアに行くかというと、「広い視野を持つため」だそうだ。by後藤

「なんか楽で、高いアルバイトないかなあ。」

そう思いながら、歩いていると、何やらでっかい外人が携帯電話で話しながら、ペコペコしている。

なんかあいつもだいぶ日本人らしくなったなあ。

そう。あいつとはインド人のラファエルだ。

「よう、こんなところで何してんの？」

僕は、彼の大きな背中を叩いた。

「こんばんわ。坂本さん。ちょっと、ビジネスの話をしていました。」

ビジネス？こいつアルバイトのことをビジネスと間違えていってるやん。

「そうなんか。お前も、お金が欲しいのか。俺もちょうどアルバイト探してるそこやねん。さっきの電話の様子やと良いアルバイト見つかったん？」

すると、彼は、ポカンとして、少しの間を置いたあと、順序良く説明した。

「まず、私はお金に困っていません。あと、アルバイトも探していません。ビジネスの話をしていました。」

「え！？ビジネスってなに？」

「そういえば、坂本さん。さっき、お金が欲しいと言っていましたか？もし、僕のビジネスに協力してくれるなら、話をしてもいいデース。」

すると、ラファエルは今までの経緯を話してくれた。

まず、彼は近々、会社を立ち上げる経験がしたいということで、（な、なんて壮絶な。）

色々ビジネスモデルを探していたみたい。

すると、ある町で、可愛いお姉さんが、化粧品のアンケート調査をしていて、男であるラファエルは、全く関係ないのだが、アンケートを書いてみたい彼の気持ちに押され、しづしづ、お姉さんが承諾。

書き終わると、その会社『考える人化粧品』のテスターをもらえ、それに感動したという。

そして、彼はひらめいた。

化粧品のテスターを渡してまでも、化粧品会社は女性のアンケートが重要であると。また、アンケートとテスターは立派な営業にもなると。

でも、アンケート調査みたいなものを自社するのはコストがかかる。ならば、代理店がアンケート調査を受け持つのはどうだ？

『そして、私は大学生。化粧品に興味を持っている女性なら、構内にたくさんいマース！

私が、アンケート代理の仕事を受け持ちましょう！
さらに、たくさんの女性と話せるチャンスも増えマース！』

とさっき、化粧品会社の人と電話してたわけね。」

「はい。そうデース。でもたくさんの女性と話せるチャンスなんて一言も言ってません。」

相変わらずラファエルは、冗談が通じない奴だ。

まあ、でもこれは本当にチャンスだ。
化粧品のアンケートを取りながら、女性と話せて、お金までもらえる。

「ラファエル。今回だけ言わせてもらおう・・・お前、天才。」

「はい。有り難うございます。まだ、信頼とお金が少ないので、会社は作りませんが、僕が社長なので、坂本さんの給料はぼくが決めますね。」

・・・

「な、なんてやろうだ。」

こうして、数日後、アンケート用紙と化粧品のテスターが『考える人化粧品』から届いてから、ラファエルのビジネスが始まった。

「社長。どうやって、この大量のアンケート用紙記入させればいいんですか？」
僕とラファエルは小さな教室を拠点として、大量のアンケート用紙とテスターを眺めていた。
自称社長のラファエルは、スーツで来ていた。

「はい、とりあえず、色々試してみたいので、まず、大学の正門辺りで、片っぱしから書いてもらおうと思いマース。」

「あーよく不動産会社がやってるやつね。よし、それならできそうだ。」

僕たちは、とてもルンルンしていた。

なぜなら

ナンパじゃなくて、女性に喋りかけることができるからだ！

「化粧品のアンケート調査をしまーす。答えてくれた方には、テスターをプレゼントしまーす！」

僕は少し恥ずかしかったが、大きな声を出して、呼びかけた。

すると、みんなざわざわこちらを見始めて、ある女性が

「私アンケートやります。」

とこちらに来てくれた。

キ、キター！早速、可愛い子！

「アルバイトですか？」

彼女がアンケートに答えながら話しかけてきた。

僕は、ちょっとモテようとして

「いや、アルバイトじゃなくて、化粧品関係の仕事をしてて。」

と尝试してみた。

化粧品関係の仕事とか、超かっこいいやん！

「そうなんですか。すごいですね！これ、アンケート書き終わりました。」

彼女の笑顔に僕は

「あ、有り難うございました！」

と笑顔で返した。

なんて楽しいんだ、この仕事は！

しかし、それ以降、パラパラとしか女性がやって来なくなった。

「なあ、人少なくなったな。」

「そうですネ。やっぱりテスターだけじゃ、アンケートに答えてくれないみたいデース。こんなこともあろうかと次の作成用意していマース。」

そうして、ラファエルはおもむろに、ネスレのキットカットを取り出した。

「お前、チョコ食ってる場合じゃないぞ。」

僕は、おもむろにキットカットを袋のまま半分に割り、そして、半分を食べてやった。

「坂本さん。テスターと一緒に、キットカットもあげましょう。そう。なぜなら女性は甘いモノが大好きなのデース。」

こうして、僕たちはテスターとキットカットをえさにアンケートを書いてもらった。

彼の言った通り、キットカットの力は絶大だった。

構内で、キットカットを食べる女子大生たち、それを見て、「私もたべたい。」「あそこでアンケートに答えるともらえるよ！」との会話が繰り広げられ、口コミが口コミを呼び、さっきよりも女の子たちが集まってきた。

「はい、アンケート書き終わった人は、こちらに置いていってくださいーい。くれぐれもキットカットだけ持ちかえらないようお願いしまーす！」

僕は小さな笑いも入れながら、大きな声で集客&アンケート回収を行った。

その一方で、ラファエルは、声も小さく、ひたすら「アリガトウゴザイマス。アリガトウゴザイマス」と言っていた。

彼は、どうやらシャイで営業向きではなさそうだ。

辺りは少し、オレンジ掛かり、夕方の講義が終わると同時に、人が減ってきた。
今日はこれくらいでいいだろう。

僕とラファエルは本拠地である小教室に戻り、ふう～とため息をついて座った。
今日は慣れないことをしたせいか、とても疲れた。

「なあラファエル、今日俺ら、すごい頑張ったよなあ。あんだけアンケート書いてもらってさ。
・・・なんでまだ、こんなに白紙のアンケートが残っているんだあー！」

「今日のやり方は、良くなかったみたいですね。労務費がとてらかかってしまいマース。
でも、大丈夫です。明日の作戦は考えてありますから。」

そういつて、僕たちは解散し、翌日の午後、また講義を終えた後に、本拠地に集まった。

「それで、今日はどんな作戦なんですか社長。」

自称社長のラファエルは、今日もスーツで社長っぽく喋った。

「今日は、大学内にある『考える人館』を押さえました。そこで、人を一気に集客して、アンケートを書かせマース。

ちなみに、今回はドリンク付きデース。」

「か、考える人館・・・」

そう、そこは教授たちが恐れている場所、学生たちが講義をサボっては、ただただ、だらだら過ごす時の館。

良い場所を押さえるじゃないですか！社長！

そうして、僕たちはただただ、だらだら時間をもてあましている学生たちを横目に、アンケート調査の準備をした。

まあ、ドリンクとお菓子とテスターをテーブルに置いただけだが。

準備が整ったところで、僕は大きく息を吸い、声を大にした。

「みなさん、少し聞いてください。特に女性の方。むしろ、女性以外無視してください。ちょっと、今から、化粧品のアンケートに協力してもらいたいですけど、もし、アンケートに答えてくれたなら、ここにあるお菓子とジュースをプレゼントします！できれば一人一個ね。あと、化粧品会社からテストのプレゼントもありますので、どんどん書きにきてくださいーい！あと、もし今日どっかに友達いる人は、その人たちもツイッターかフェイスブックでどしどし呼んできてください！」

「よろしくお願ひしマース！」

ラファエルも今回は大きな声を出している。

わいわいがやがやとみんな楽しくアンケートに答えてくれている。

あと、室内な分、疲れもあまり感じない。

さすが、大学生のSNSの力かアンケートが途切れることはなかった。

もしかしたら、このままいけば、もうアンケート終わっちゃうのでは？

とラファエルと嬉しく話し合っているとき、事件は起きた。

バンッ！

大きな音を立てて、扉を開ける人がいた。

どうみても学生に見えない。おっさんだ。いや、事務のおっさんだろう。

すごい形相でこちらにやってきた。

「君たち、これは一体何なんだ。こんな人をたくさん集めて、ここは大学だ。勝手に、化粧品の何かわからんが、営業されちゃ困るんだよ。おい、君学生か？企業の人か？」

君とはもちろんラファエルのことで、スーツを着ていたせいか、企業の人に見えたらしい。

僕は慌てて、

「彼は学生です。」

と言った。

「君か、このイベントの代表は？」

事務のおっさんが、ラファエルに問いただした。

ここで社長としての人格が試される。

すると、彼は重い口を開いた。

「・・・ワ、ワタシニホンゴワカリマセーン。」

っおーうい!!!

な、なんてやろうだ。この期におよんで、外人キャラを出してきた。

すると、事務のおっさんも「そうか」と言って、

「じゃあ、お前だな。ちょっと、事務所に来てもらおうか。」

となぜか、僕が連行される羽目になった。

この日のこと、あのときのラファエルの表情を僕は一生忘れないだろう。

次の日、また、僕とラファエルは小教室に集まっていた。

「まさか、あれがイケない行為だったなんて。自由な国アメリカでは考えられません・・・」

「確かに、日本は厳しい・・・ってお前、インド人やんけ！」

昨日、僕は事務のおっさんに呼びだされて、

「誰の許可を取っているんだ！」とか「そんな営利目的なことを大学で勝手にするな！」とかば、ぼくに言われても・・・という内容をたくさん言われた。

だって、ぼくは社長でもないし、部下でもないし、ただのアルバイトですもん・・・

「ということで、私が色々勉強したところ、大学ではあからさまに営利目的の行動を取ってはいけないみたいデース。」

「もっと最初に、勉強しとけよっ！」

僕は社長に怒った。

「はい。ここが日本だということを忘れてました。」

「そうだよ。自由の国、アメリカじゃねーよ。インドでもねーよ。」

僕は社長に突っ込んだ。

「それで、昨日新たに手を打っておきました。まず、営利目的でないことと、きちんとした場所を手に入れること。この二つが大切デース。

まず、営利目的でないように見せかけるために、僕たちが大学生だということを使いマース。つまり、化粧品のアンケートを学術目的に使うのデース。」

「学術目的？」

僕は社長に質問した。

「はい。まず、アンケート調査をする前に、化粧品に関するプレゼンをして、お客さんに知識をプレゼントしマース。

そして、アンケートを書いてもらい、女性の化粧品の動向と注目度を経済と掛け合わせて、論文を作りマース。それで、自分たちの意見を化粧品会社にアウトプットすることで、きっと化粧品会社も喜んでくれマース。」

「なんか、俺たちが教授で、お客さんが学生みたいなことをしないとイケないんや。確かに、営利目的だけではないように見えるけど、また、めんどくさい仕事が増えたなあ。」

僕はまだ、一銭ももらってないのに、仕事が増えることに不満だった。

「ビジネスとはそういうものデース。サービスをどんどん付加しないと成長していきませーん。」

「それで場所は？」

「今回は、プレゼンを行うということで、大学のイベント時にいつも使っている、多目的ホールを借りることになりました。でも多目的ホールは超人気なので、めったに借りることはできませーん。なので、明日しか借りることができませんでした。」

「えっ、そうなの？じゃあ今日は何もしないの？」

僕は久しぶりに休めることに嬉しくなった。

「いや、今日はそのプレゼンの集客の為に、ポスターを構内に張る作業を坂本さんにはしてもらいマース。ポスターは昨日僕が、パワポでサクサク作っておきましたので、指定された場所に貼っというてくだサーイ。僕は講義に行ってきマース。」

なんてやろうだ。雑用はぼくに任せて、自分は講義に行く。

まさに、社長だ。そして僕は平社員。もしくはアルバイト。世知辛いつす。

でも、ポスターを張り終わって夕方、家に帰るとき、ラファエルが正門で一人で「明日、多目的ホールで化粧品に関するイベントがあるので、ぜひ遊びに来てくださーい！」と大きな声で宣伝しているのを見たとき、さ、さすが社長！と思った。できる人は社員の知らないところで、こういう影の努力をしているのだろう。

次の日、イベントにはたくさんの方が来てくれた。ラファエルが徹夜で作ったと言っていた資料は、とてもわかりやすく好評だった。途中で、笑いも入れたり、大学生に向けた発表の仕方もうまかった。きっと、徹夜で練習したのだろう。

化粧品の歴史とか化粧品が人に与える影響とかの資料は、みんな目を輝かせて見ている。途中、写真が出てきて、ラファエルが日本に来た時に、エイリアン（ガングロギャル）に出会ったという話は、みんな大受けだった。

講演は数回に分けられ、僕はというとラファエルの講演の陰でずっと雑用をこなしていた。しかし、講演が終わった後の大量のアンケート回収はとても嬉しかった。

こうして、アンケートはすべて集まり、僕の仕事は終わった。

数日後

「坂本さん。化粧品会社と話し合っ、無事、一回目のビジネスを終了しました。でも、仕事が遅すぎるって怒られちゃいました。反省デース。」

なんかすごくドタバタしたけれども、楽しかったし、いろんなことを学んだ気がした。でも、ぼくが期待していたのはそんなことではなかった。

「それで、こんなに働いたんだから、社長。給料ははずむんでしょね？」
ぼくは、ワクワクが止まらない。

「はい。じゃあ、給料はこの袋の中に入っています。ご苦労様デース。」

そうして、僕は数札は入ってあるであろうその袋にワクワクしながら封を開けた。

．．．

千円札が6枚。

．．．

少なっ！

「なんでこんなに少ないねん！時間返せ！そして、なにより大切なワクワク感返せ！」
僕は、早速クレームの嵐である。

でも彼は申し訳なさそうに

「すいませーん。キットカットとかポスターとかもろもろの経費を差し引いてもこれだけしかあげられませーん。

僕が不甲斐無いばかりにすいませーん。今度はもっとうまく経営したいと考えていまーす。」

そう言われると、反論できなくなってしまう。

「でも、お前はどのくらいお金もらってるねん。」

僕は気になることを聞いてみた。

「もちろん。一銭ももらってませーん。小さな会社の社長は、経営が赤字の時は給料なんかもらってられないのデース。でも、これのバネに、私は黒字の会社を作れるように頑張りまーす。」

．．．

じゃ、社長！あなたに付いていきます！

僕はお金より大切なことをたくさん学んだということで、今回は社長を許した。

逆に、今度は雑用だけじゃなくて、経理のことや資料作りなどの手伝えるようになりたいと思

った。

彼が言うには、もしこの大学でビジネスモデルが完成したのなら、他の大学でも同じことを実施して、各大学に従業員を数人置いて、会社を立ち上げてみるらしい。

もし、これがうまくいけば、僕は副社長となり、今の数十倍のお金を手に入れることができるという。

想像するだけでも恐ろしくクラクラする。

「でも、それまでには坂本さんにはビジネスについて、もっともっと勉強してもらわなければなりません。」

こうして、僕とラファエルのビジネスは始まった。

参考文献

五十音順

- ・ 課長島耕作
弘兼 憲史
- ・ [金持ち父さん貧乏父さん](#)
ロバート・キヨサキ
- ・ [50歳を超えても30代に見える生き方](#)
南雲 吉則
- ・ 人生を逆転する名言集
福本伸行
- ・ [思考は現実化する](#)
ナポレオン・ヒル
- ・ [「人たらし」のブラック心理術](#)
内藤 誼人
- ・ [「ぼうず丸もうけ」のカラクリ](#)
ショーエンK
- ・ 僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか？
木暮 太一
- ・ [やる気スイッチ！](#)
山崎 拓巳
- ・ [夢をかなえるゾウ](#)
水野 敬也
- ・ ゆるく考えよう
ちきりん

考える。大学生。

<http://ryoucoro.blog.fc2.com/>

著者：rYou

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dtk0598/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58708>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58708>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ